中之条町教育委員会発掘調査報告書第５集

大塚遺跡群

五十嵐遺跡 第２次

１９８５

群馬県吾妻郡中之条町教育委員会

序

近年農地の効率的利用を図るための土地改良事業が大きな規模で進められています。

中之条町は多くの埋蔵文化財をはじめとして、国、県指定文化財、史跡等多くの文化財に恵まれた所であります。これら大切な文化財を保護、保存し後世の人々に伝えて行くことは私たちに課せられた任務であります。

大塚地区は以前から埋蔵文化財包蔵地として周知されておるところでありますが、既に昭和59年団体営大塚ほ場整備組合により五十嵐遺跡を調査し、今回はそのひきつづきとして、道路および削平部分について記録保存のため発掘調査を実施いたしました。

調査は、縄文時代の竪穴住居や平安時代における住居等の遺構・遺物が発見され多くの貴重な資料が得られ、地域の歴史を解明していくにあたり貴重な資料を加えることができました。ここにその成果の一端を報告します。

この調査を実施するにあたり、ご指導ご協力をいただきました関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

昭和61年3月

中之条町教育委員会
教育長　　一場秀司

例　　言

1．本書は、中之条町大字大塚地区ほ場整備事業に伴ない事前調査された、中之条町大塚遺跡群五十嵐遺跡第2次の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、中之条町教育委員会が群馬県教育委員会の指導を受け実施した。

3．発掘調査の期間は、昭和60年8月19日～昭和60年9月18日である。

4．本書の編集は、田村宏司が行った。縄文時代の遺構、土器については丸山公夫、石器については白石典之が、歴史時代の遺構、遺物については谷島一馬が行った。なお、文責は文末に記す。写真撮影は遺構及び歴史時代の遺物は谷島が、縄文時代の遺物は丸山が行った。

5．挿図中のスクリントーンは、焼土分布を示す。

6．発掘調査、本書の作成にあたり、下記の方々の御協力をいただきました。（敬称略）
群馬県教育委員会文化財保護課、中之条町文化財専門委員、山武考古学研究所
群馬県埋蔵文化財調査事業団、株式会社測研、井上唯雄、近藤功、洞口正史（以上県教委）
原雅信、丸山公夫（以上群埋文）、大塚昌彦（渋川教委）、白石典之（筑波大生）、大貫健、平田貴正、伊庭彰一、武部喜一、折原洋一、桐谷優、千田幸生（以上山武）

調　査　組　織

1．調査主体者　　中之条町教育委員会

2．調査担当者　　谷島一馬（中之条町教育委員会　臨時職員）

3．調査協力者　　小渕幸子、斉藤つね、斉藤君代、関はる、吉田むつ、湯本重太郎、斉藤近子、萩原としみ、小池みやの、相京治郎　（順不同）

4．事　務　局　　社会教育課長　福田　孝行
〃　係長　田村　宏司
〃　主事　福田　英二

目　次

序……1
例言……2
調査組織……2
I　調査に至るまで……5
II　遺跡の立地と周辺の遺跡……5
　1．地理歴史学的背影……5
　2．周辺の遺跡……6
III　発掘調査の概要と経過……7
IV　遺構と遺物……9
　1．住居跡……9
　　4号住居跡……9
　　5号住居跡……11
　　6号住居跡……12
　　7号住居跡……14
　　8号住居跡……15
　　9号住居跡……21
　　10号住居跡……27
　　11号住居跡……27
　2．土坑……29
　　21号土坑……29
　　22号・23号土坑……29
　　24号～33号土坑……30
　3．ピット群……31
V　まとめ……33
VI　結　語……34

挿図目次

第1図　五十嵐遺跡の立地と周辺の遺跡……6
第2図　遺跡の地形と発掘区域……7
第3図　五十嵐遺跡全体図……8
第4図　4号住居跡実測図……10
第5図　4号住居跡カマド実測図……11
第6図　5号・6号住居跡実測図……12
第7図　5号住居跡カマド実測図……13
第8図　6号住居跡カマド実測図……13
第9図　7号住居跡実測図……14
第10図　8号住居跡実測図……15
第11図　4号住居跡出土遺物実測図拓図……17
第12図　4号・6号住居跡出土遺物実測図拓図……18
第13図　8号住居跡出土遺物実測図拓図……19
第14図　9号・10号住居跡実測図……22
第15図　9号住居跡出土土器拓影図……23
第16図　9号住居跡出土石器実測図……24
第17図　9号住居跡出土石器実測図……25
第18図　11号住居跡実測図……28
第19図　11号住居跡出土遺物拓影・実測図…28
第20図　21号～23号土坑実測図……29
第21図　土坑出土土器拓影図……30
第22図　土坑出土石器実測図……30
第23図　土坑出土石器実測図……31
第24図　ピット群実測図……32

図版目次

図版1　五十嵐遺跡全景……35
図版2　五十嵐遺跡遠景……36
五十嵐遺跡北側区近景……36
図版3　五十嵐遺跡南側区近景……37
4号～7号住居跡……37
図版4　4号住居跡……38
5号住居跡……38
図版5　6号住居跡……39
7号住居跡……39
図版6　8号住居跡……40
8号住居跡炭化材分布……40
図版7　9号住居跡……41
10号住居跡……41
図版8　11号住居跡……42
21号土坑、22・23号土坑……42
図版9　住居跡出土遺物 (1) ……43
図版10　住居跡出土遺物 (2) ……44
図版11　住居跡出土遺物 (3) ……45
図版12　9号住居跡出土土器……46
図版13　9号住居跡出土土器・石器……47
図版14　11号住居跡出土土器・石器……48
図版15　土坑出土土器・石器……49

I 調査に至るまで

中之条町大塚地区は、昭和57年より61年にわたり土地改良が、中之条町役場農林課および大塚地区団体営ほ場整備組合により実施されている。

このほ場整備地区は「群馬県遺跡台帳西毛編II」に№3069に記される縄文時代集落跡の宿割遺跡に近接する地域にあり群馬県教育委員会文化財保護課により、ほ場整備地区全域を試掘し、五十嵐地区において遺構が確認された。

昭和59年6月、大塚地区ほ場五十嵐地区工事において住居跡が発見され、県文化財保護課、大塚地区ほ場整備組合、当町教育委員会とで埋蔵文化財保護と、ほ場整備の調査協議が行われ、五十嵐地区内の発堀調査が行われた。

今回の調査は前年にひきつづき発掘調査を行うもので矢島一馬を臨時調査員とし、事業実施に伴って遺跡が破壊される部分、道路部分を中心として昭和60年8月19日より発掘調査を実施した。

（田村　宏司）

II 遺跡の立地と周辺の遺跡

1．地理歴史学的背影

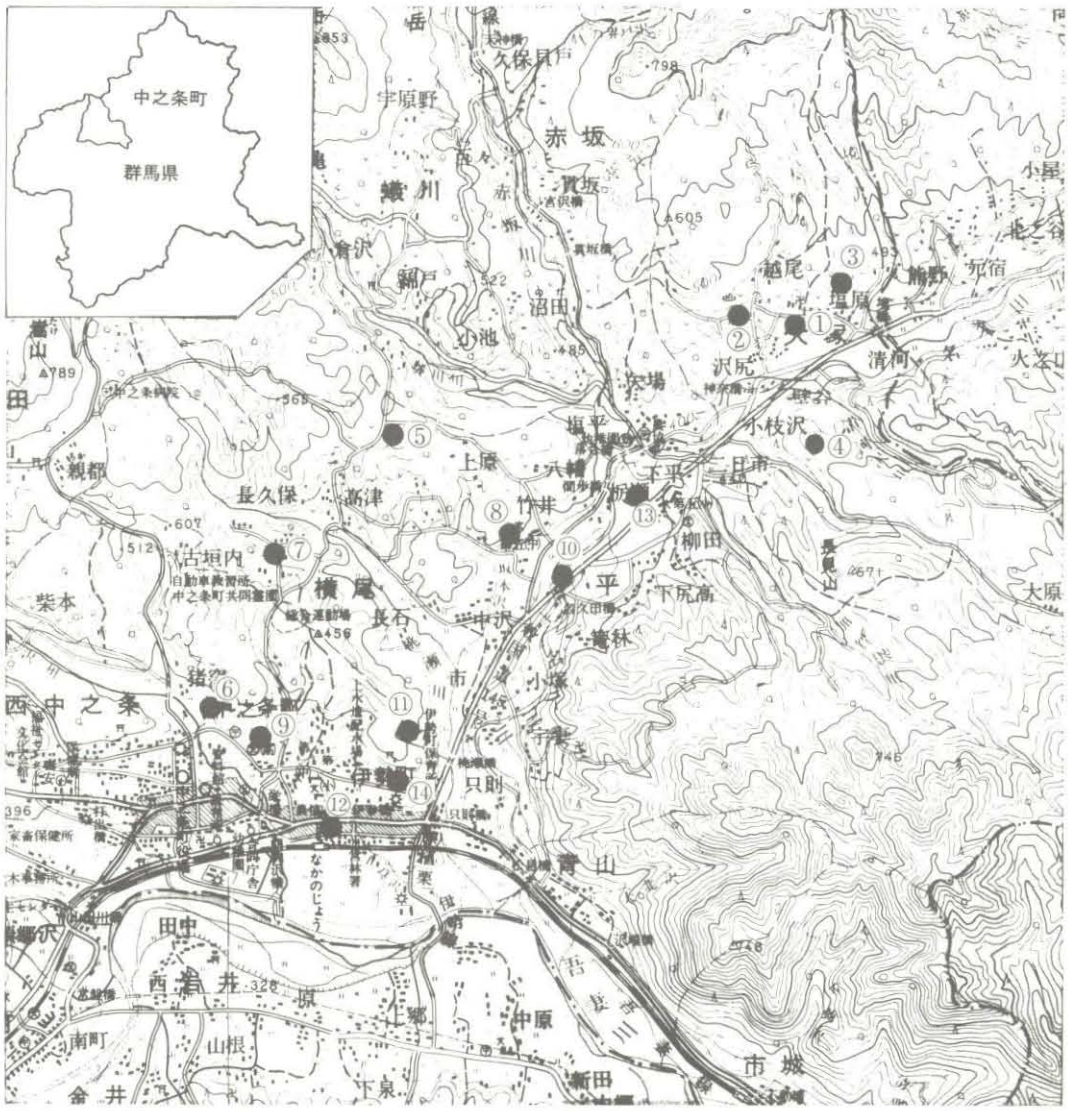
五十嵐遺跡は中之条町大字大塚1718～1720番地に所在する。中之条町市街地より北東約7㎞国道145号線沿に位置する。地形は名久田川右岸に発達する河岸段丘面上で、北部は第三紀の山地があり、南部は名久田川を狭み第四紀火山の小野子火山がそびえる。名久田川は西南部へ流下し、中之条の段丘平担面へと注いでいる。当遺跡は北部の山地より流出する大塚沢の小扇状地面上にあり、南側は名久田川の段丘平担面につづいている。又縄文、弥生時代集落址である宿割遺跡は当遺跡の西約200mの地点に位置する。

大塚地区に於ける中近世の史実は吾妻記に詳述されているが、ここでは管見の範囲に於て同地の古代中世に視点を置いて概述する。大塚には古くから「ぬる湯」と別称される著名な大塚温泉がある。口伝によると鎌倉時代まで遡るという。現在廃寺となっている同地の湯平温泉薬師堂は同寺縁起では弘仁時代の創建とされ、この温泉が四万、沢渡両温泉と共に中世には開発され集落形成に大きな役割を果していると思考する。大塚地区に於ける注目すべき史実として、源頼光の四天王の一人碓氷貞光が挙げられる。四万日向見の湯は貞光が霊夢によって発見した湯であり、この瑞祥に感じた貞光は一宇の堂を建て薬師如来を祀ったと伝えられ、これが国指定重文の、「日向見薬師堂」である。又碓氷郡松井田町新掘湯の沢の金剛時も碓氷貞光の創建と伝えられている。大塚の宗学寺はもと天王山貞光庵といい、貞光が長元年間大塚村に来て草ぶきの庵を建てたもので（貞享元年　宗学寺文書）同寺境内裏手に天正十九年在銘の二基の墓塔と並んで一基の古い墓碑があり、信憑性については検討の余地があるがこの墓碑が貞光の墓と伝えられている。貞光は源頼光に従って上総の国府に仕えていたという。市原市牛久の薮八幡宮旧縁起によれば源頼光は天禄元年上総大守に任ぜられ幸田（現市原市牛久）に住し、重臣の渡辺　綱を始め貞光等四天王と

云われる側近も上総国府に任た事を記している。中世末大塚には沼田城主　真田信行の重臣北能登守が居宅を構え　宿割りを実施し、武家屋敷、町家併せて三百軒を連ねていたという。大塚温泉から南に向って降る道の両側にはその頃の区画と考えられる規則的な区画の農地が開ける。宿割は慶長４年大火により全戸灰盡に帰した事が吾妻記に誌されている。　　（谷島　一馬）

参考文献

「中之条町誌」　第三巻　中之条町誌編纂委員会　昭和53年　「市原郡誌」　市原郡教育会　大正５年　山口武夫　「日向見薬師堂の歴史」　中之条町教育委員会　昭和60年　松井田町　金剛寺「略縁起写」　森田秀策　「金剛寺略縁起解説」



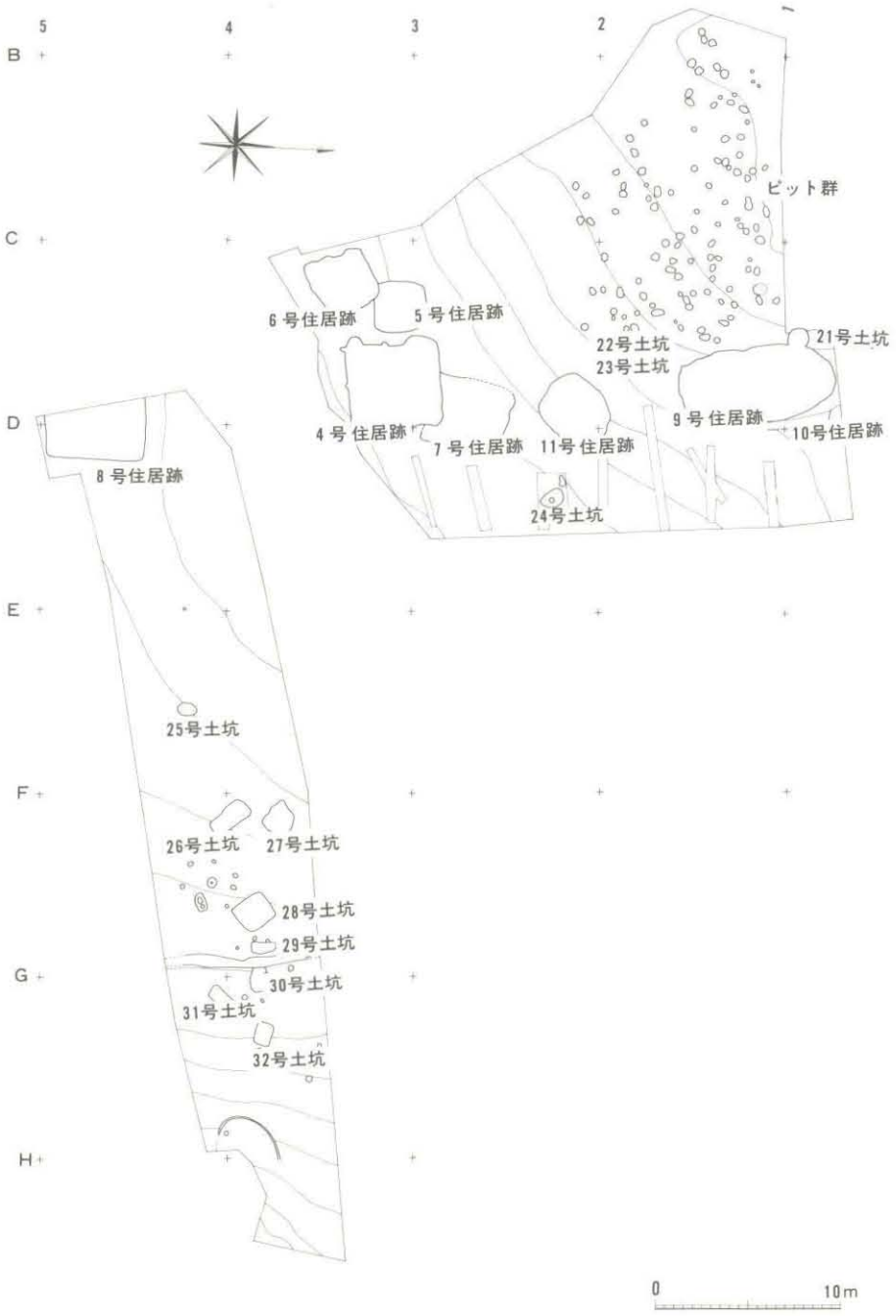
第１図　遺跡の立地と周辺の遺跡（50000分の１）

１五十嵐遺跡　２宿割遺跡　３諏訪原遺跡　４寄居原遺跡　５奥山原遺跡　６法満寺遺跡　７長久保遺跡　８名久田中学校遺跡　９法満寺士師遺跡　10樋塚古墳　11真田水牢遺跡　12伊勢町遺跡　13平古墳群　14天代瓦窯遺跡

第2図　遺跡の地形と発掘区域（1/1000）

III 発掘調査の概要と経過

本遺跡は、中之条町大塚地区ほ場整備事業に先がけて行われた発掘調査である。調査は、対象となるほ場整備地区と新設予定の道路部分に、遺構の有、無及び分布状況を目的とした確認調査を昭和60年4月9日より同年4月12日までトレンチ法を用いて行なった。その結果、対象区域内に竪穴住居跡、土坑等の遺構が確認された為に、調査面積869m²を対象に本調査を実施することになった。



第3図　五十嵐遺跡全体図

調査は、昭和60年８月19日より昭和60年９月18日を予定して開始された。

調査方法は、グリッド方式を採用した。方眼は10mを単位とし、呼称は東西方向にアルファベットで南北方向を数字で表した。

検出された遺構は、住居跡では土層観察の為の十字ベルトを設定し、四分法で進めた。平面図断面図等の実測は20分の１、カマドは10分の１を用いた。土坑は、土層断面の観察のために半裁し、土層断面実側を行い、その後穴掘し、平面実側を行った。縮尺は20分の１とした。ピットは群としておさえて、40分の１とした。

今回の調査において、住居跡10軒　土坑10基　ピット群を検出した。

以下調査の経過について記す。

昭和60年８月19日

調査を開始する。ほ場整備地区より表土排土をはじめる

８月20日～24日

表土排土をひきつづき行う。排土終了地区より遺構確認作業を行う。

24日に道路予定地の排土を終了する。

８月26日

遺構確認と平行して、グリット設定及び遺跡確認図の作図の作成を行う

８月27日～９月17日

遺構の調査をはじめる。遺跡は新しい時期の土抗、ピットより行ない、住居跡は歴史時代から縄文時代と調査をすすめた。

９月18日

遺構全体の空撮を行い、その他、各記録の補完を行い、本日をもってすべての調査を終了する。

Ⅳ 遺構と遺物

１．住居跡

４号住居址（第４図、図版４）

本址はC－２・３グリットに跨って検出されたものである。主軸をN－98°－Wにもち、西及び南側壁が、東及び北側壁に比べてやや長くなるが、概ね長軸・短軸が、5.13m×4.72mの方形を呈する。

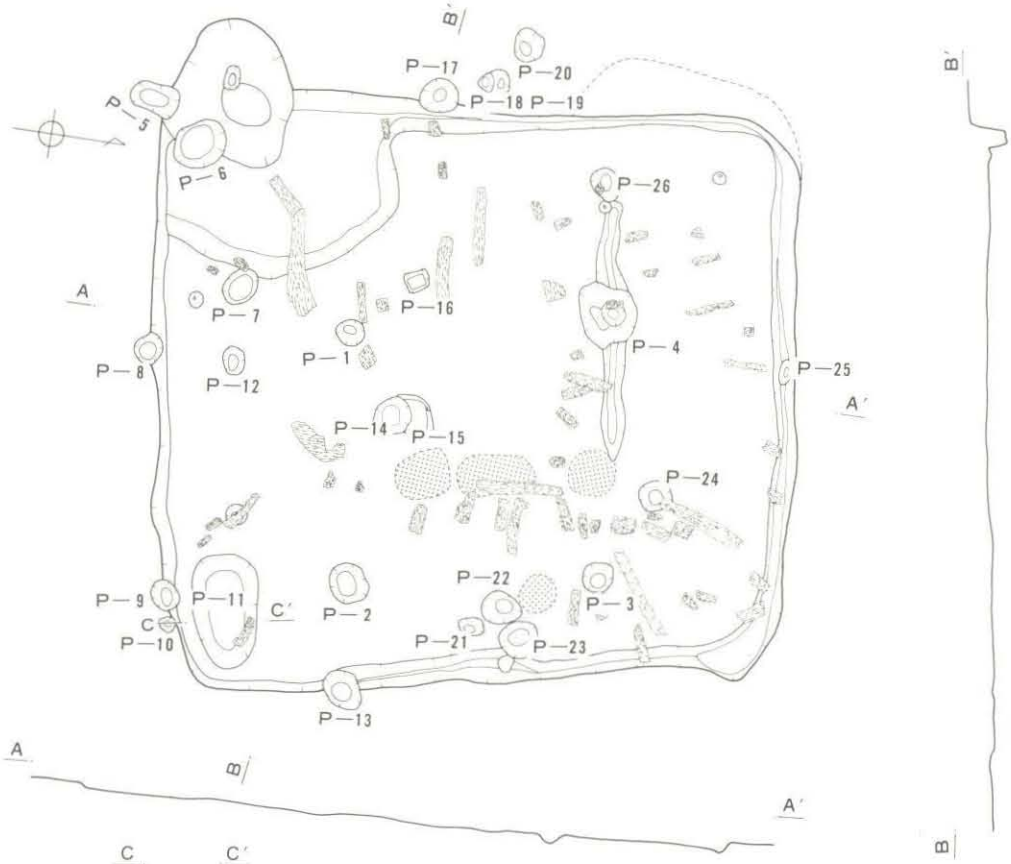
住居址内に充塡される覆土は、黒褐色を基調に５層に分層され、下層附近では炭化物の層が検出され、本址が、火災を受けた事を示している。確認面下の掘り込みは、最も深い部分で20cm程度と浅く、壁の立ち上がりは何れも緩やかである。床面は僅かながら起伏が見られるものの、ほぼ平担である。柱穴は26穴検出されているが、後世の撹乱も含まれる可能性がある。しかし、P－１からP－４は主柱穴となりうるものであろう。又、P－11は貯蔵穴とも考えられる。壁溝は、南壁及び東西壁の南寄りでは検出されていないが、他は浅く、細いながらも掘り込みが認められる。P－24からP－４にかけて間仕切状の溝が掘り込われている。拡張に依るものかは不明で

ある。

カマドは南西コーナー附近に於いて検出されたものである。皿状に掘り込んだ後、これを埋め戻して構築されている。粘土、山砂等の構築材の使用は不明瞭で、拳大から人頭大の石を積み上げて袖に、又、ひと抱えもある大型の石を天井石に利用しているようである。ほぼ全壊していて、全容については不明となっている。火床は楕円形の焼土の広がりをもって把えられ煙道は壁ラインから約1m張り出し半円形を呈する。カマドの前部は床面より低く特徴的である。

尚、本址は北側で、7号住居址と重複するが、調査時に於ける新旧関係は不明であった。

遺物は、集中はみせない。全体に炭化材を多く出土しているが、各炭化材は、住居址の中央に向って放射状に出土するものが多い。　　（谷島　一馬）

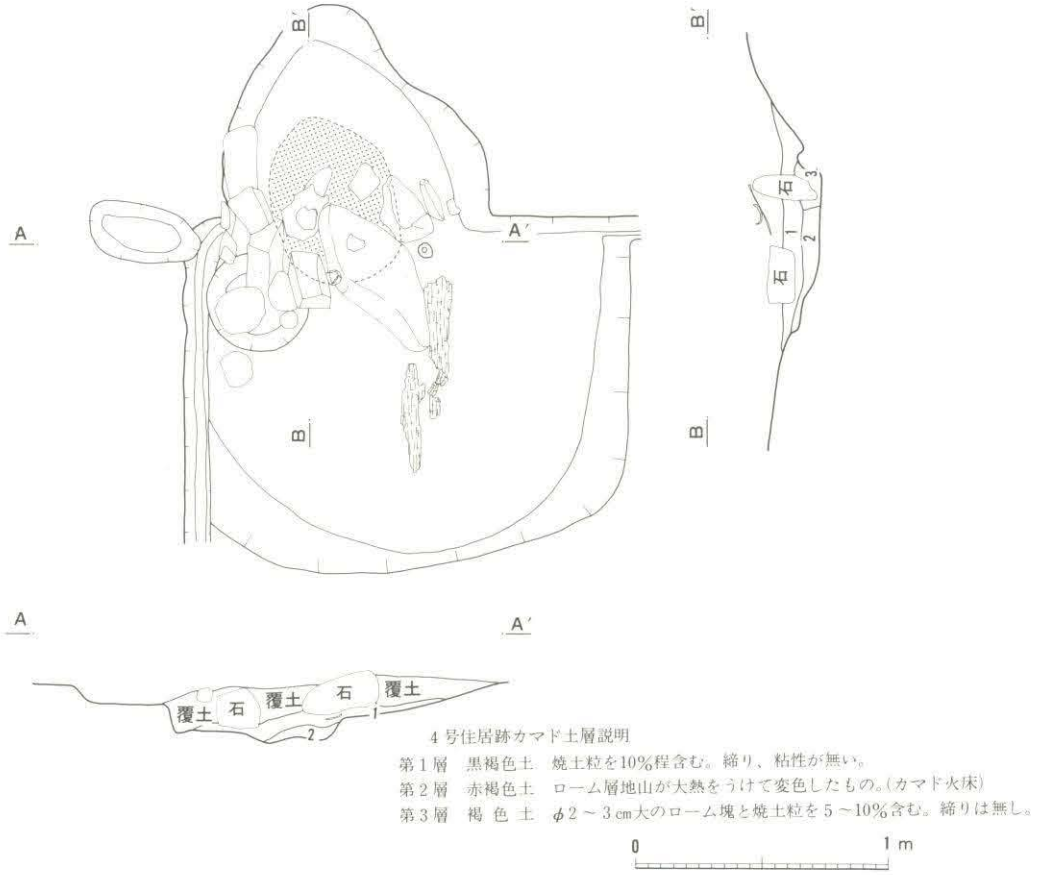


貯蔵穴

第1層　黒褐色　ローム粒子混入。砂質粘土。
第2層　黒褐色　ローム粒子を若干混じる。ややしまりあり。
第3層　黒褐色
第4層　黒褐色　ロームブロック多量に混じる。
第5層　黒褐色　やや明るい。
第6層　黒褐色　微粒ロームやや多く混じる。

0　　2 m

第4図　4号住居跡実測図



4号住居跡カマド土層説明

第1層　黒褐色土　焼土粒を10%程含む。締り、粘性が無い。

第2層　赤褐色土　ローム層地山が大熱をうけて変色したもの。(カマド火床)

第3層　褐 色 土　φ2～3㎝大のローム塊と焼土粒を5～10%含む。締りは無し。

第5図　4号住居跡カマド実測図

5号住居址（第6図、図版4）

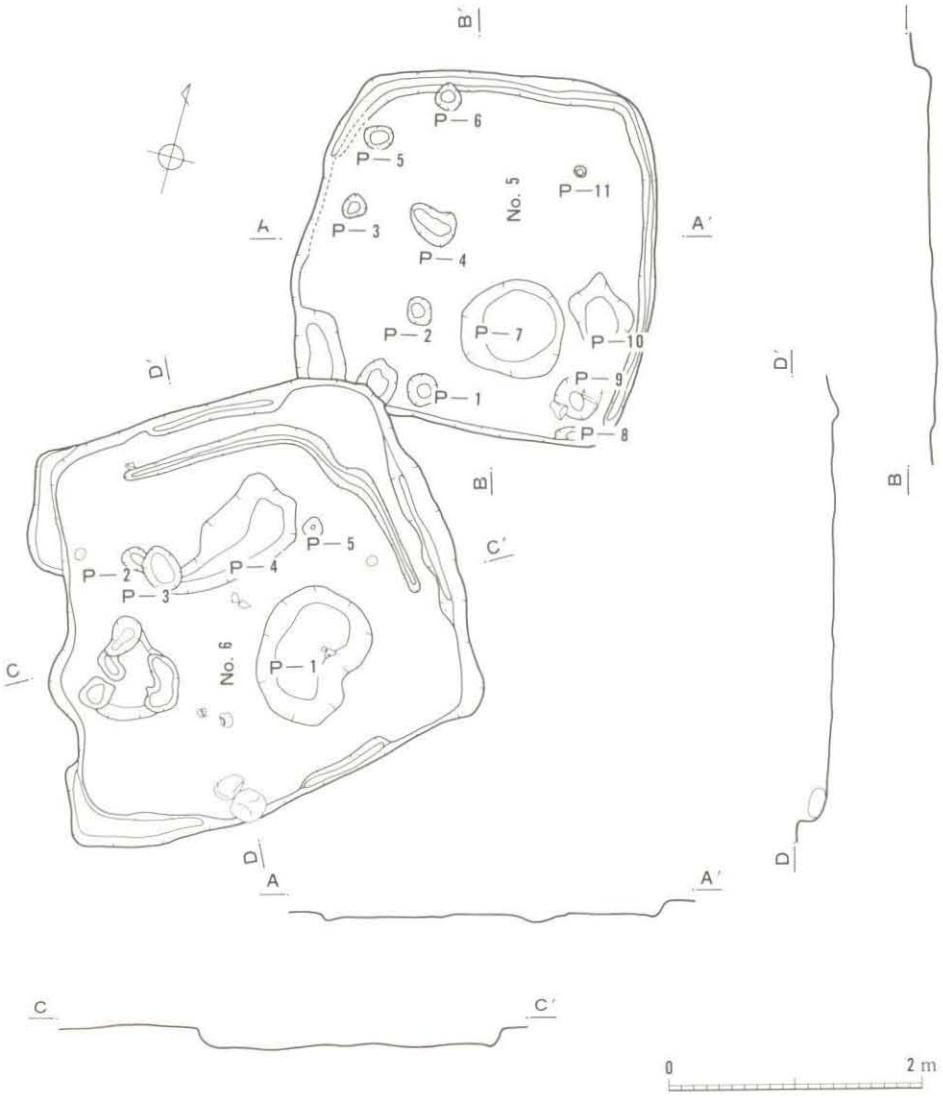
本址は、C—2・3グリッドに跨って検出されたものである。主軸をN—2°—Wにもち、東壁が他の壁に対し僅かに長くなる為均正を欠く。プランは2.85×2.82の隅丸方形を呈する。

住居址内に充塡される土は、黒褐色と茶褐色を基調に7層される。確認面下の掘り込みは、北側で最も15㎝程度、南壁では5㎝未満の立ち上がりとなっている。壁の立ち上がりは何れも緩やかである。床面は起伏が激しく、南側に向って傾斜する。ピットは、11穴検出されているが、その配置状況に規則性は認められない。P—7は、円形の浅い皿状を呈するものであるが、貯蔵穴とすには若干疑問が残る。壁溝は、北及び東側壁直下に確認されている。掘り込みよ巾も狭く浅い。南及び西壁では検出されていない。

カマドは南西コーナーに設置されている。壁外への掘り出しは20㎝程と少なく、火床は不整円形を呈する。小ピットを掘った後、これを埋め戻してカマドを構築し、構築材には人頭大の礫が用いられたようである。大半は抜き取られている。

尚、本址は6号住居址と重複関係にあり、本址のカマドが6号住の上に覆っている。この事から本址と、6号住では本址の方が新しい。

遺物の出土量は少ない。カマド内から僅かながら出土している。　（谷島　一馬）

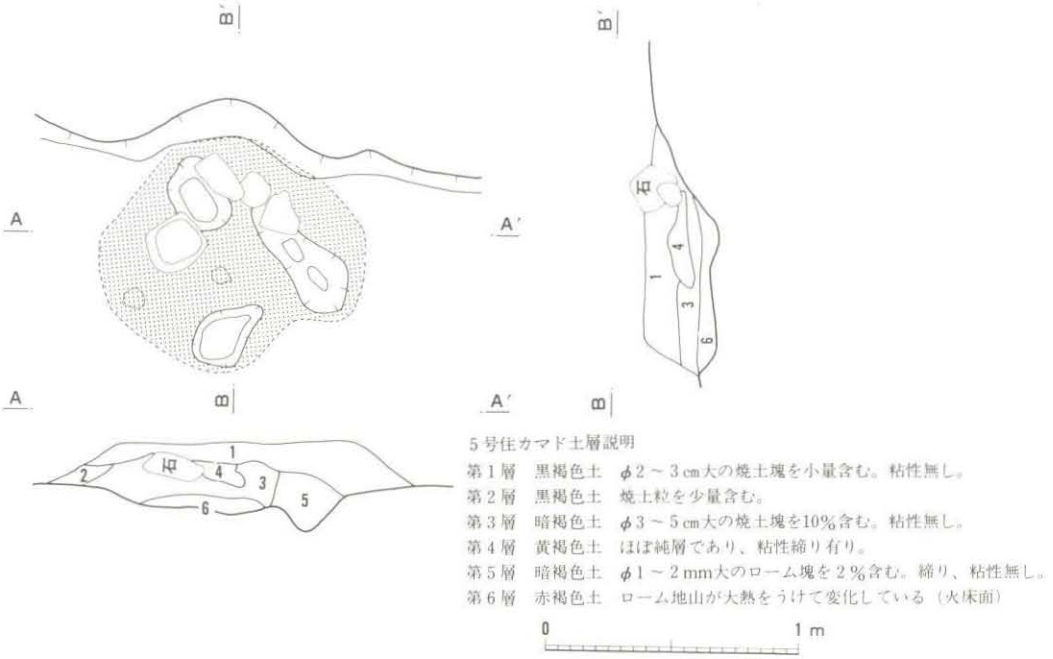


第6図　5・6号住居跡実測図

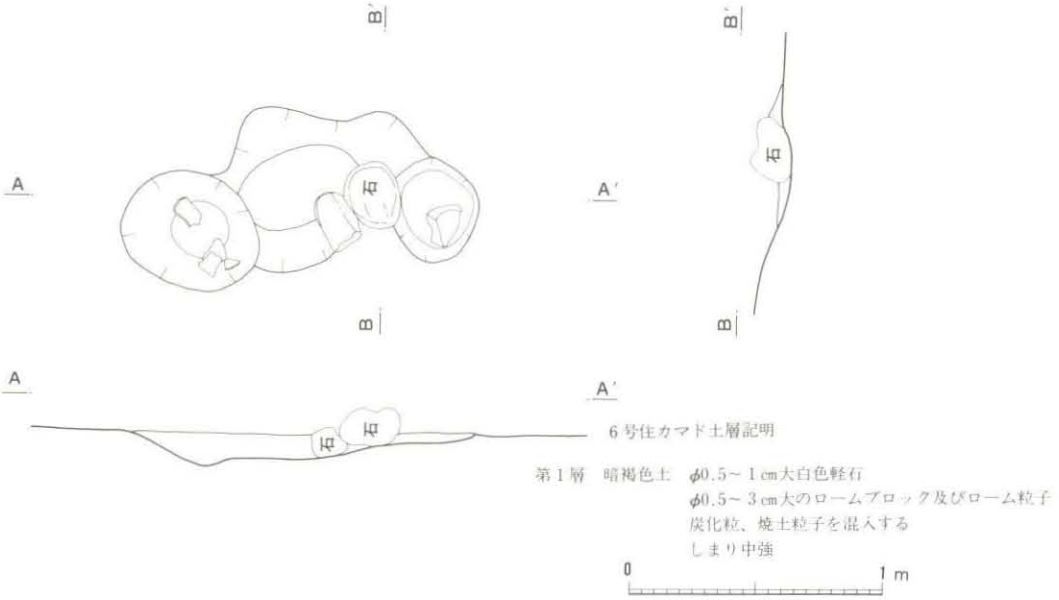
6号住居址（第6図、図版5）

本址は、C—3グリッドに於いて検出されたものである。主軸をN—25°—Wに持ち、南壁が北壁に比べて長くなる為め均正に欠ける。プランは3.20m×3.25mの方形を呈する。

住居址内に充填される土は、黒褐色を基調に粘性・混入物等より8層に分けられる。確認面下の掘り込みは、16cm前後を測る。壁の立ち上がりは南側で、最も緩やかになる他、何れも緩やかに立つ。床面は僅かに起伏が認められる。柱穴は5穴確認されているが、柱穴とするには適正に欠けるものばかりである。壁溝は、北及び東側壁に検出されているが、二重に掘り込まれてい



第7図　5号住居跡カマド実測図



第8図　6号住居跡カマド実測図

る。これは、住居址西コーナーの張り出し、南西コーナーの掘り込みから考えて、拡張が行なわれた可能性を示している。又、壁溝の一部が南壁側にも見られる事から、全周していた可能性もある。

カマドは、西壁ほぼ中央に設置されているものであるが、大半が破壊されている。僅かに、焼土及び炭化物の分布が見られ、構築材に用いられたと考えられる。石が3点出土している。又、掘り

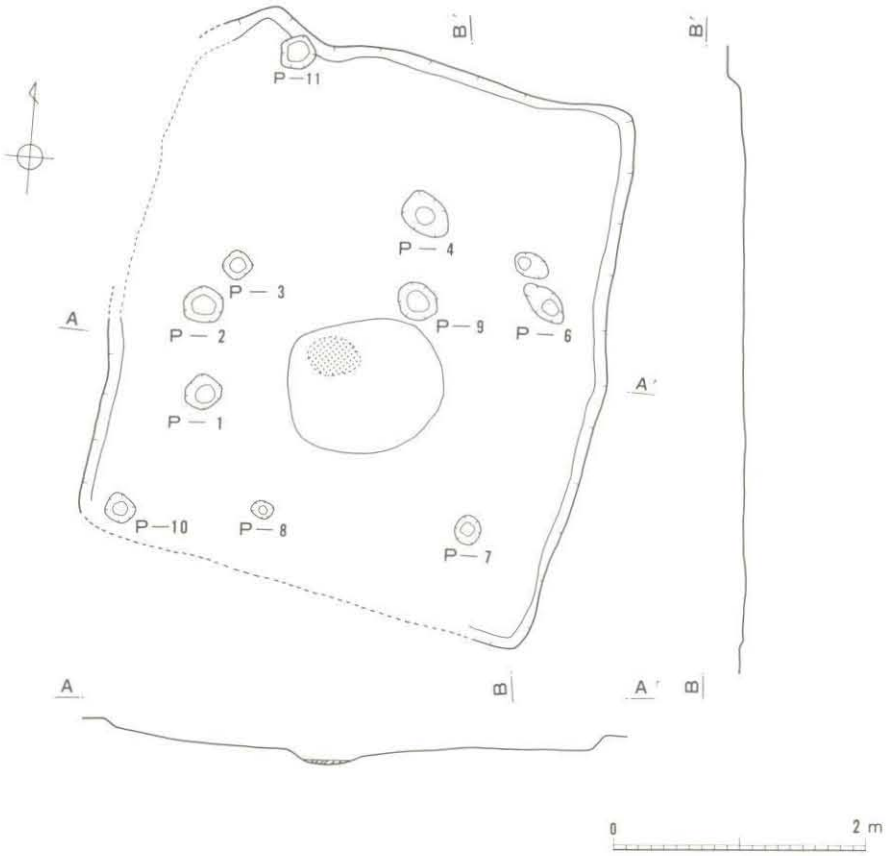
方は、浅い皿状の掘り込みが3穴認められ、この中からは土器片もまとまって出土している。

尚、南壁側からも礫が出土しているが、これはカマド構築に用いられた石が動かされて置かれたものと考えられる。又、5号住の所で記述したが、本址と5号住の切り合い関係は、本址の立ち上がりが5号住カマド下より検出されたもことより、5号住に比べ本址の方が古くなる。

7号住居址（第9図、図版5）　（谷島　一馬）

本址は、C—2・D—2グリッドに跨って検出されたものである。主軸をN—80°—Wに持ち南側で4号住居跡と重複する関係上プランは不明瞭であるが、4.30m×3.75mの方形を呈するものと考えられる。確認面からの掘り込みは浅い皿状を呈し、中央部の最も古い部分で、約20cm程である。従って、壁の立ち上がりも何れも緩やかである。又、床面も中央に向って緩やかに傾斜する。壁溝はない。柱穴はP—1からP—8までは円形に配され、P—9はこの円形の内側に、又、P—10・11は外側に配置されている。掘り込みは50cmから10cm程度までと、ばらつきがある。床はソフトローム層上に形成され、余り踏まれた形勢は認められない。プランの中央部に若干酸化発色し、なんらかの火を使用した痕跡が認められるが炉と認定するまでには至らない。

（谷島　一馬）



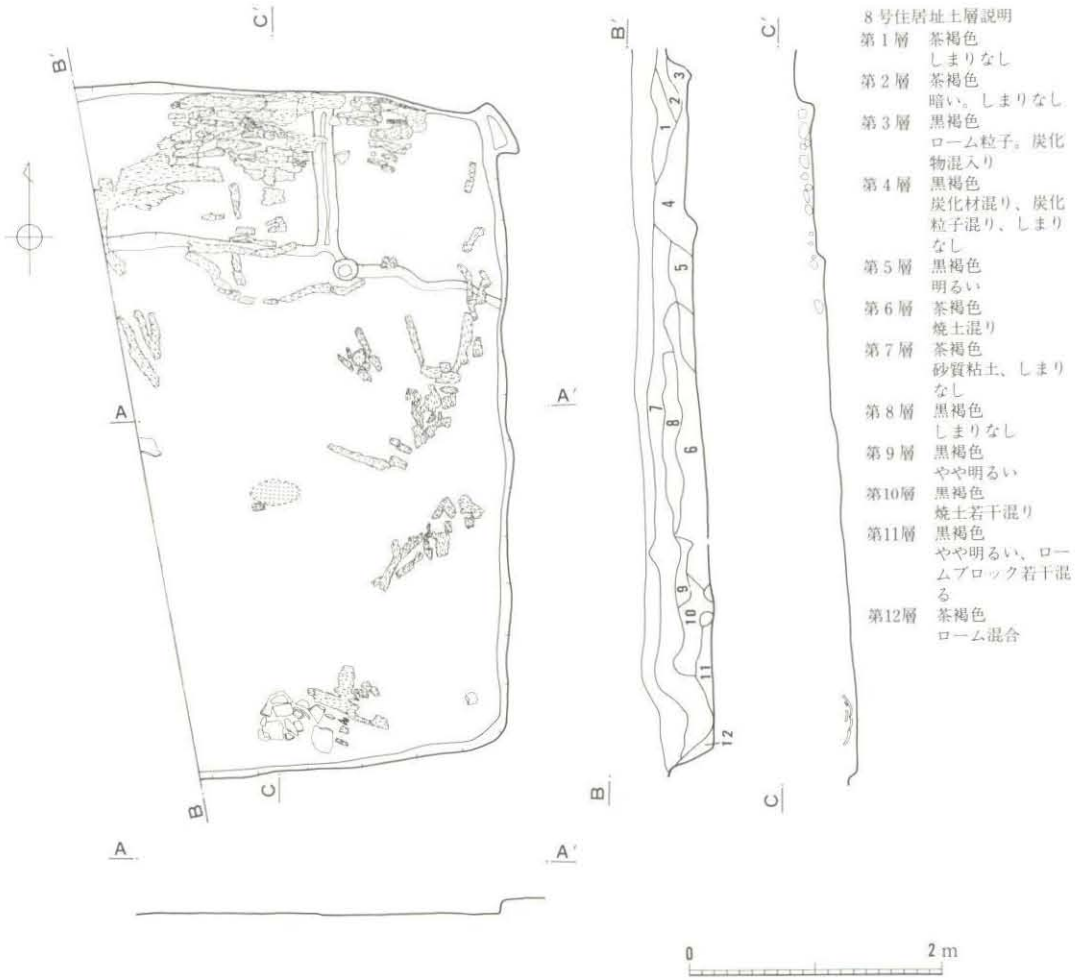
第9図　7号住居跡実測図

8号住居址（第10図、図版6）

本址は、C—4・D—4グリッドに跨って発見されている。西側半分が調査区外となる為、形状は不明であるが、プランは一辺5.30m前後の方形を呈するものと考えられる。

住居址内に充填される土は、黒褐色と茶褐色を基調に2層に分層される。さらに、最下層では炭化物が多量に混入され、本址が火災にあった事を示している。確認面下の掘り込みは、最深部で20cm前後であるが、調査区外になる西側の壁による観察では、掘り込み面はさらに20cm程高くなっている。床面は南側に向って緩やかに傾斜し、少々起伏がある。又、北側1/3程度は一段高くなり、ベッド状になっている。壁溝は認められないが、北側のベッド状の高まりを二分するような間仕切状の溝が検出されている。柱穴は1穴のみ検出されている。この柱穴より間仕切状の溝は延びている。カマドは検出されていないが調査区外に位置するものと考えられる。

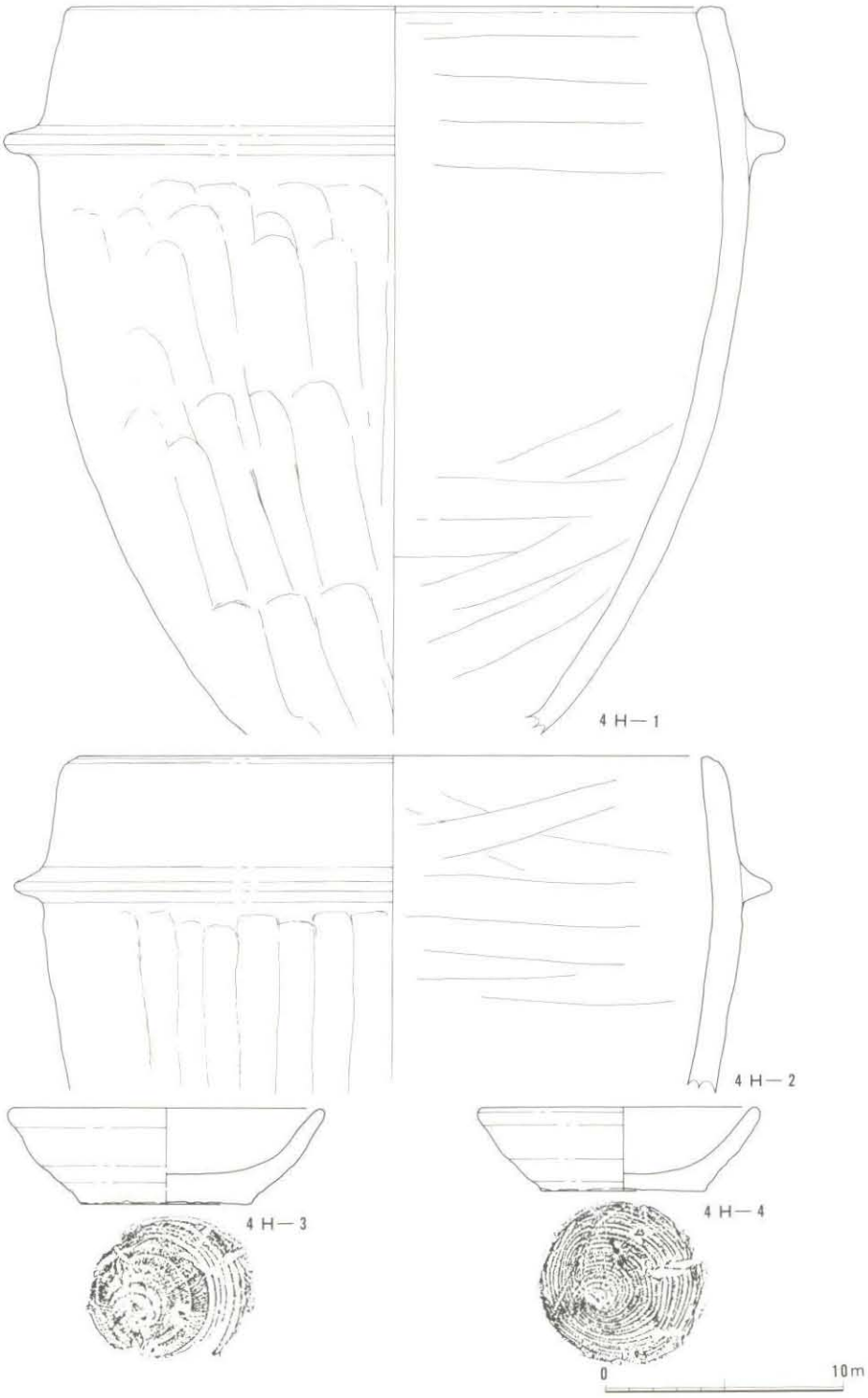
遺物は、南壁寄りで一括資料が出土した他、大量の炭化材が検出されている。炭化材の方向は壁に対して併行になるものが多く壁面の構築材と考えられるが検討を要す。　　（谷島　一馬）



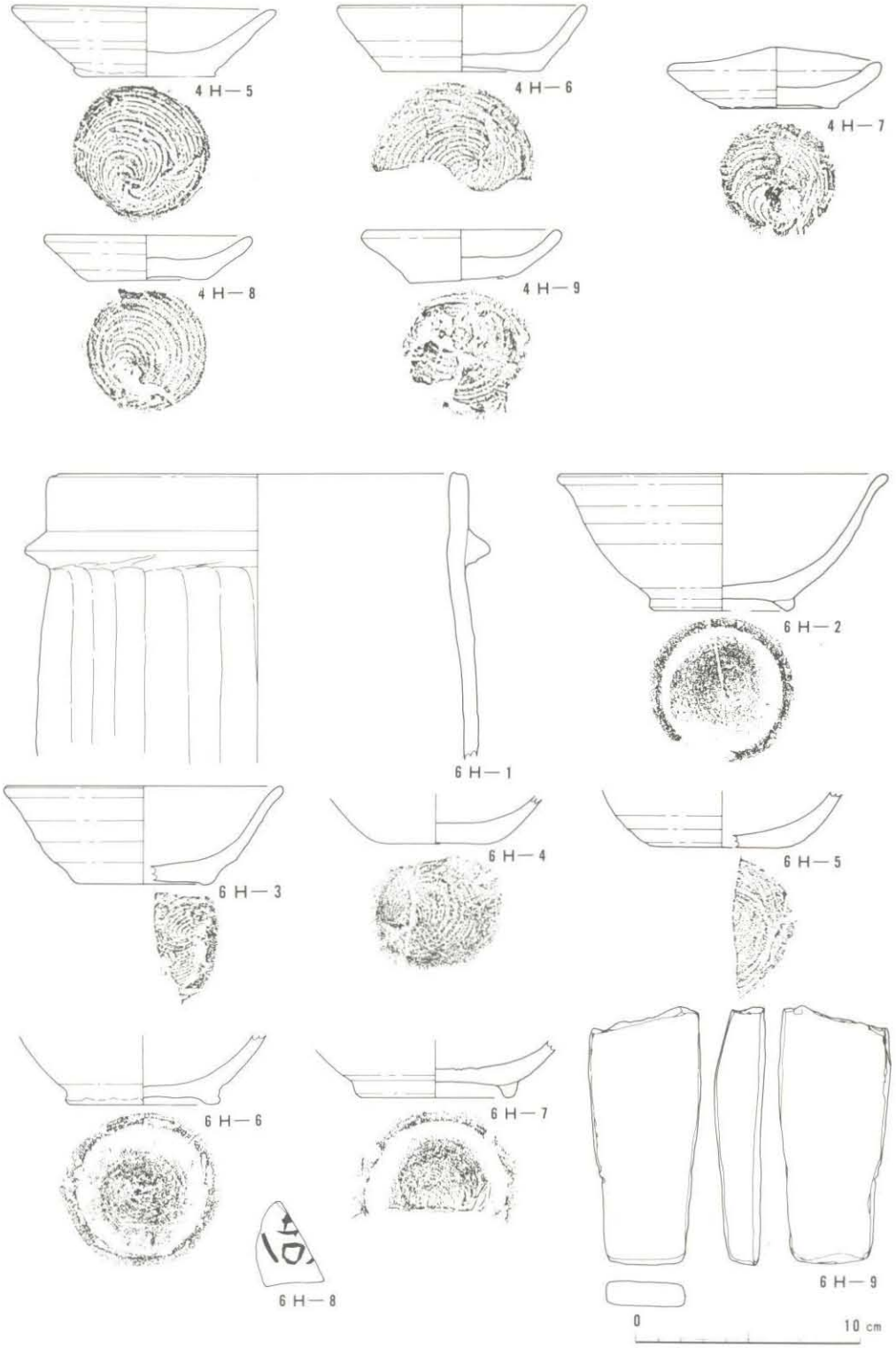
第10図　8号住居跡実測図

第１表　出土遺物観察表

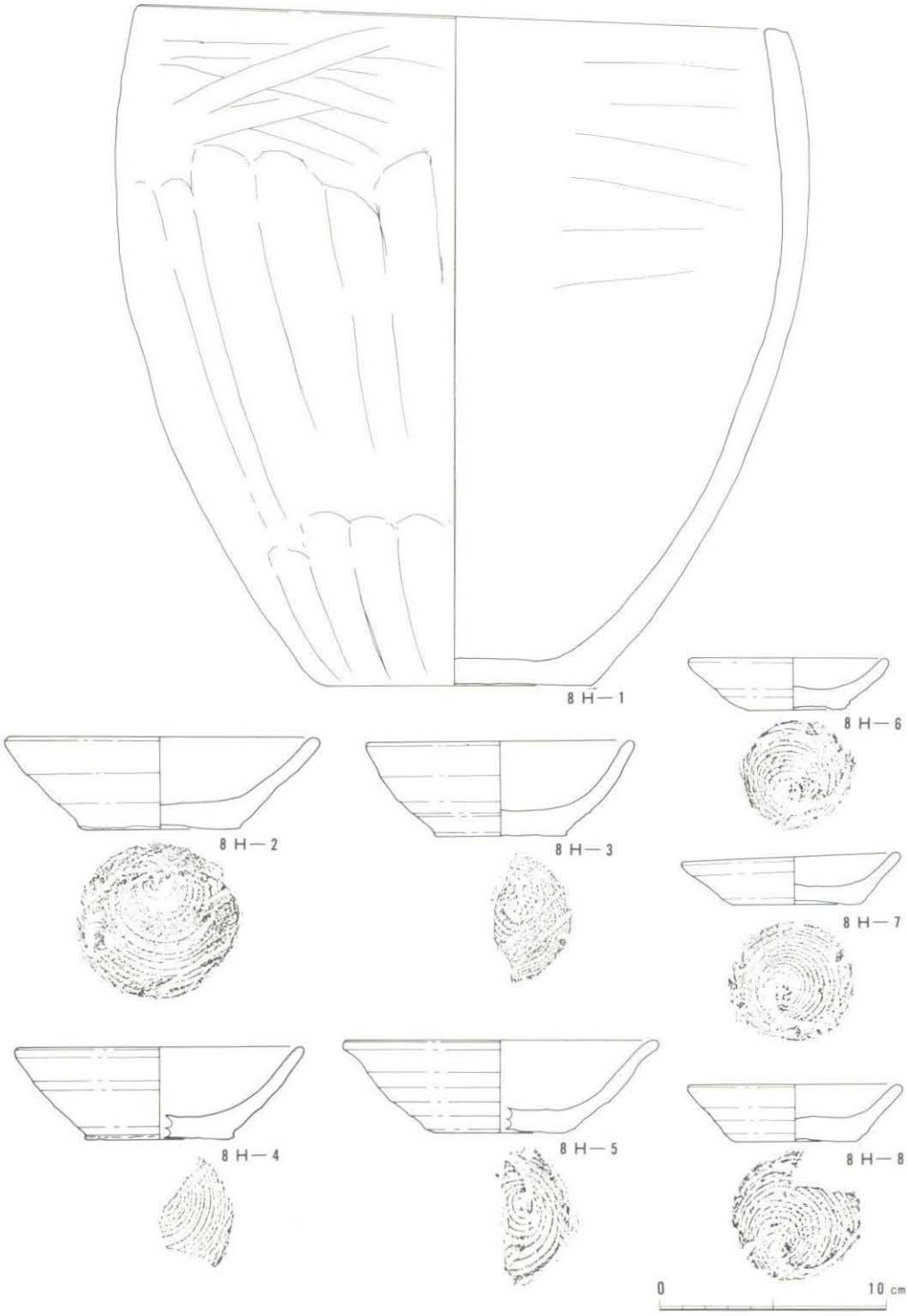
遺物番号		器種	法量(cm) 口径	器高	底径	器形の特徴	成整形の特徴	胎土	焼成 色調	遺存度	備考
4号住居跡	1	土師羽釜	27.0			胴部から口縁部にかけて内彎し、口縁部平担面をつける。鍔は断面二等辺三角形に近い。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面上から下への縦位ヘラ削り。内面ナデ。	小砂礫を多量に含む	不良（酸化）	1/3 底部全損	
	2	土師羽釜	26.2			直立気味に立ち上がる。胴部より口縁部僅かに内傾する。鍔は断面三角形を呈す。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面上から下への縦位ヘラ削り。内面ナデ。	砂粒を含む	不良（酸化）橙褐色	口縁部～胴上半部1/2	
	3	土師坏	12.9	4.1	7.1	体部内彎気味に立ち上がり口縁部で外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り未調整。	砂粒を含む	不良（酸化）橙褐色	1/2	剥落激しい。
	4	土師坏	11.5	3.6	6.9	体部内彎気味に外傾する。	ロクロ整形。底部回転糸切り未調整。	密	やや良（酸化）暗褐色	完形	
	5	土師皿	11.3	3.3	6.0	体部外反気味に立ち上がる。	ロクロ整形。底部回転糸切り未調整。	密	不良（酸化）暗褐色	ほぼ完形	灯明皿 内外面油煙付着
	6	土師皿	10.8	3.1	7.2	体部直線的に外傾する。	ロクロ整形。底部回転糸切り未調整。	砂粒含む	やや良（酸化）橙褐色	1/3	
	7	土師皿	9.0	2.8	5.3	体部内彎気味に立ち上がる。	ロクロ整形。底部回転糸切り未調整。	密	良（還元）暗灰褐色	1/2	体部外面に布目痕。イビツ
	8	土師皿	8.9	2.1	5.3	体部直線的に外傾する。	ロクロ整形。底部回転糸切り未調整。	密	良（還元）灰褐色	ほぼ完形	
	9	土師皿	8.4	2.4	5.0	体部内彎気味に外傾する。	ロクロ整形。底部回転糸切り後、ナデ？	密	不良（酸化）褐色	2/3	
6号住居跡	1	土師羽釜	17.5			口縁部直立し、鍔は断面三角形を呈する。	口縁内外面横ナデ。胴部外面下から上への縦位篦削り。内面ナデ。	少砂礫（長石、石英）を多量に含む	不良（酸化）褐色	口縁部～胴上半部1/4	
	2	土師埦	14.5	6.1	6.2	体部内彎気味に立ち上がり口縁部で外反する。高台断面方形。	ロクロ整形。高台貼付後、内外面ナデ。	密	良（酸化）灰褐色	1/3	
	3	土師坏	12.4	4.4	6.1	体部内彎気味に立ち上がり口縁部で外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り未調整。	少砂礫含む	良（酸化）褐色	1/5	
	4	須恵坏			5.3	やや直線的に立ち上がる。	ロクロ整形。底部回転糸切り未調整。	砂粒を含む	良（一部酸化）灰白色	底部1/2	
	5	須恵坏			6.2	内彎気味に立ち上がる。	ロクロ整形。底部回転糸切り未調整。	密	不良（還元）灰白色	底部1/2	
	6	須恵埦			6.5	内彎気味に立ち上がる。	ロクロ整形。高台雑に貼付後、内外面ナデ。	密	良（還元）灰褐色	底部完存	
	7	須恵埦			6.7	高台僅かに開く。	ロクロ整形。底部回転糸切り痕残す。高台内外面ナデ。内面ロクロ痕顕著。	密	良（還元）暗灰褐色	底部1/2	



第11図　4 号住居跡出土遺物実測図・拓図



第12図　4・6号住居跡出土遺物実測図・拓図



第13図　8号住居跡出土遺物実測図・拓図

出土遺物観察表

遺物番号		器種	法量(cm) 口径	器高	底径	器形の特徴	成整形の特徴	胎土	焼成 色調	遺存度	備考
6号住居跡	8	須恵坏				口縁部で外反する。	ロクロ整形	密	良(還元) 灰白色	口縁部片	体部外面に不明墨書
	9	砥石				上面を欠損。五面に使用が認められ、特に表裏面が顕著である。					
8号住居	1	土師甕	27.0	30.2	12.0	胴中央部に張りをもち、口縁部内傾気味に立ち上がる。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面上から下への縦位ヘラ削り。内面ナデ。	小砂礫を含む	不良(酸化) 橙褐色	2/3	スス付着
	2	土師坏	13.5	4.2	7.0	体部直線的に外傾する。	ロクロ整形。底部回転糸切り後、雑なヘラ削り。	砂粒含む	不良(酸化) 灰褐色	完形	イビツ 内外面油煙付着
	3	土師坏	11.7	4.2	5.8	体部内彎気味に立ち上がり口縁部で外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り未調整。	砂粒を含む	良(酸化) 暗橙褐色	1/3	底部外面にヘラ記号?
	4	土師坏	12.4	4.1	6.1	体部内彎気味に外傾する。	ロクロ整形。底部回転糸切り未調整。	密	やや良(酸化) 橙褐色	1/5	
	5	土師坏	13.7	4.2	5.8	体部内彎気味に立ち上がり口縁部で外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り未調整。	砂粒多量に含む	良(酸化) 暗褐色	1/3	
	6	土師皿	8.5	2.3	4.7	体部内彎気味に立ち上がる。	ロクロ整形。底部回転糸切り未調整。	砂粒含む	やや良(酸化) 暗褐色	完形	
	7	土師皿	9.5	2.4	5.5	体部直線的に外傾する。	ロクロ整形。底部回転糸切り未調整。	砂粒含む	良(酸化) 褐色	完形	
	8	土師皿	9.2	2.5	5.5	体部直線的に外傾する。	ロクロ整形。底部回転糸切り未調整。	砂粒含む	不良(酸化) 褐色	1/2	内面口縁部油煙付着

9号住居跡（第14図・図版7）

本住居跡は、調査区を道路により2分された北側区北東隅に位置し、C－0・C－1グリッドにわたり検出された。本跡は北東部分で重複する10号住居跡を切って構築される。また、住居跡内中央北東側には風倒木痕がある。

本跡北側は調査区域外のため未調査であるが、平面形状は南北に長い隅丸長方形を呈すると思われる。その規模は南北現存長8.7m、東西4mを測り、長軸方位はN－12°－Wを示す。本跡はローム面において確認された。ローム面は北から南東方向へ傾斜し、本跡確認面での比高差は35cmを測る。

本住居跡は、確認面より6cm掘り込む南・北の平坦部分と、中央で最深35cm掘り込む中央部皿状凹み部分とに3区分される。南側の平坦部分の規模等から北側の平坦部分未調査部分は、現存長より1.3m広がり、本住居跡の規模は長軸10mを測ると思われる。

まず、中央部皿状凹み部分は、東・西を全体の平面形に内接する楕円形を呈し、その規模は南北6.6m、東西4mを測る。床面は若干の起状をもちながら中央に向かって傾斜し、最深部で南・北の平坦面より20cm下がる。壁高は、東壁で15cm、西壁で25cmを測り、南・北壁は平坦面から南で6cm、北で6cmを測る。北東部には、南北1.8m、東西1.7m、深さ0.3mの不定形の風倒木痕がある。炉は、長軸で2分する西側中央に1基地焼炉がある。

南・北平坦面は、住居跡全景の隅丸長方形から中央部皿状凹み部分の楕内形を除いた変形扇形を呈する。規模は、南北を住居跡長軸ライン上で中央部分端から壁まで、南側は1.6m、北側は現存長で0.3mを測る。東西は全景接地点間で、南側は3.86m、北側は3.61mを測る。壁高は、南側で南壁6cm、東壁8cm、西壁25cm、北側で東壁8cm、西壁25cmを測る。床面は堅く、若干中央部分に向かって傾斜する。

炉は、住居跡中央で長軸ライン西側に地焼炉を検出し、東側にはカーボン分布が認められた。地焼炉は、南北50cm、東西60cmを測る範囲で隅丸方形に焼土分布を示し、その北西側に南北40cm、東西34cm、深さ22cmの落込みがある。長軸ライン東側には、南北40cm、東西53cmの楕円形にカーボン分布を示す。

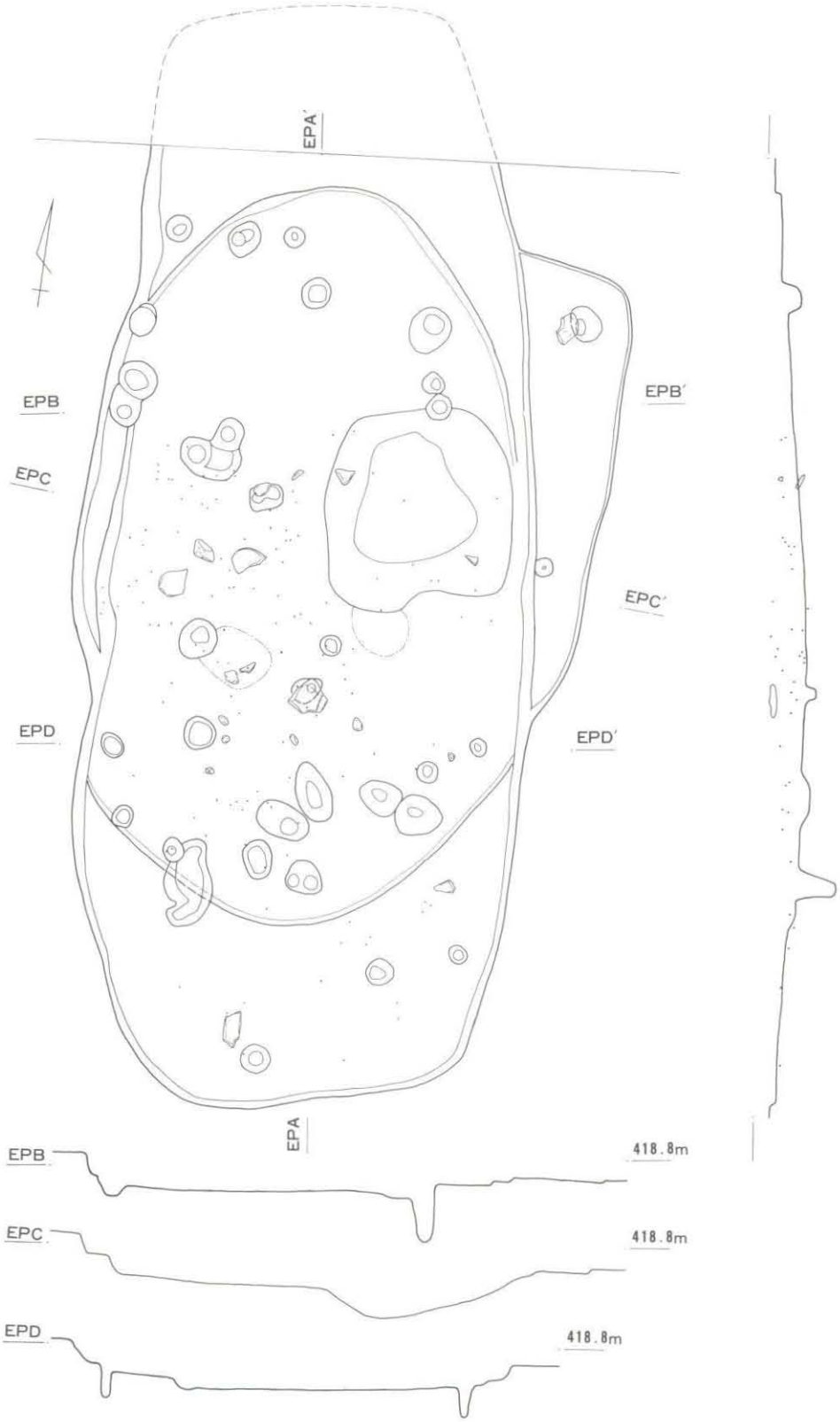
ピットは、38本検出されたが、それらの規則性は不明瞭である。なお第14図のピットは、調査時において明らかな攪乱ピットを除いたもので図版－7と若干異なる。

遺物は、住居跡中央部に集中し、床面付近に細片として出土した。第14図において、その分布と長軸ラインを中心に80cm幅の遺物について投影を行った。第15図17・18は、住居跡中央で床面より27cm上面において、横位につぶれた形で一括出土した。（丸山公夫）

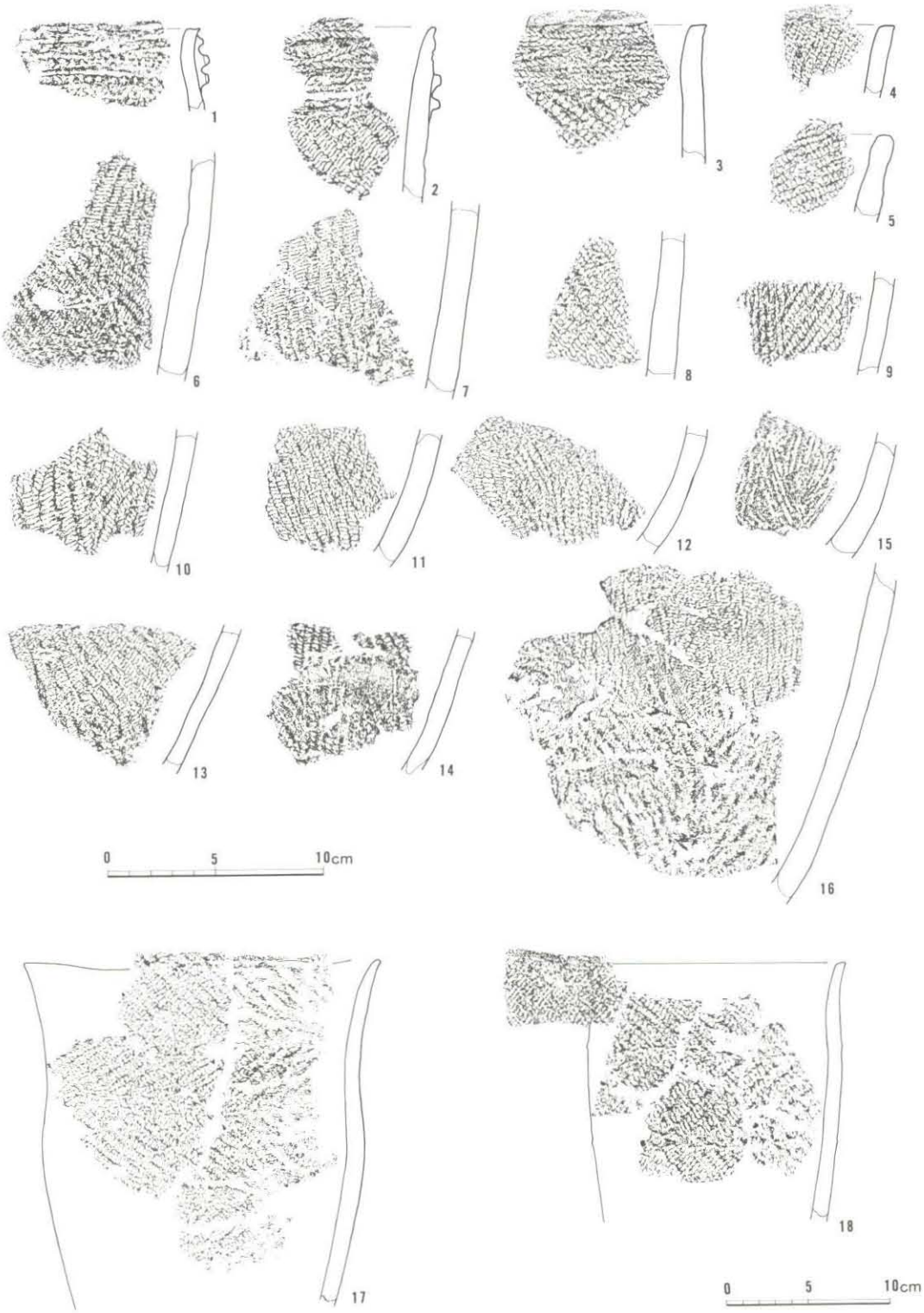
出土遺物（第15－17図、図版12・13）

土器

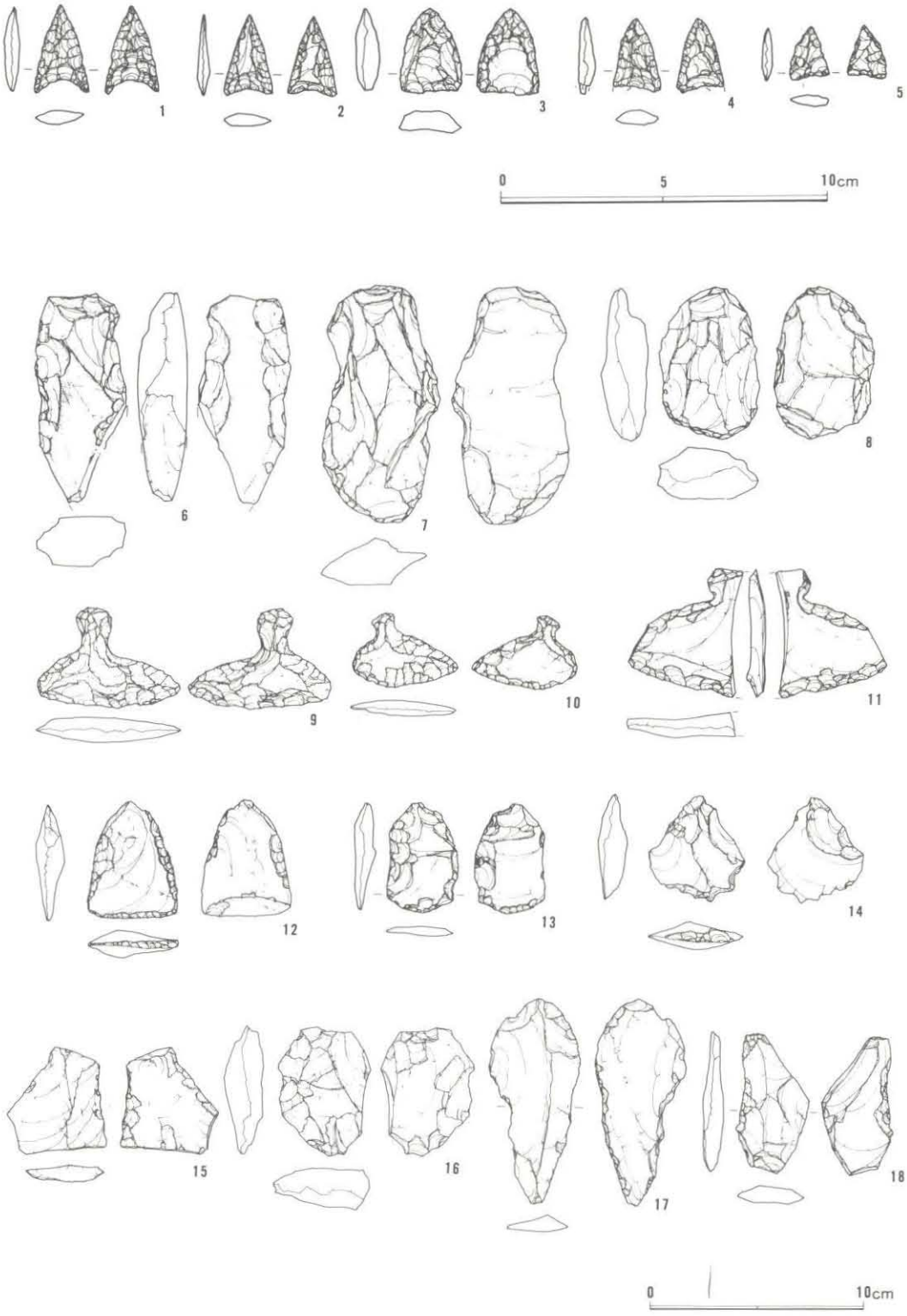
本住居跡出土土器は、焼成が悪くすべて胎土に繊維を含み、器壁の内外面には繊維のはみだしたものが脱虚痕として残っている。第15図に掲載した拓影図は、図版－12のうちの代表的なものである。



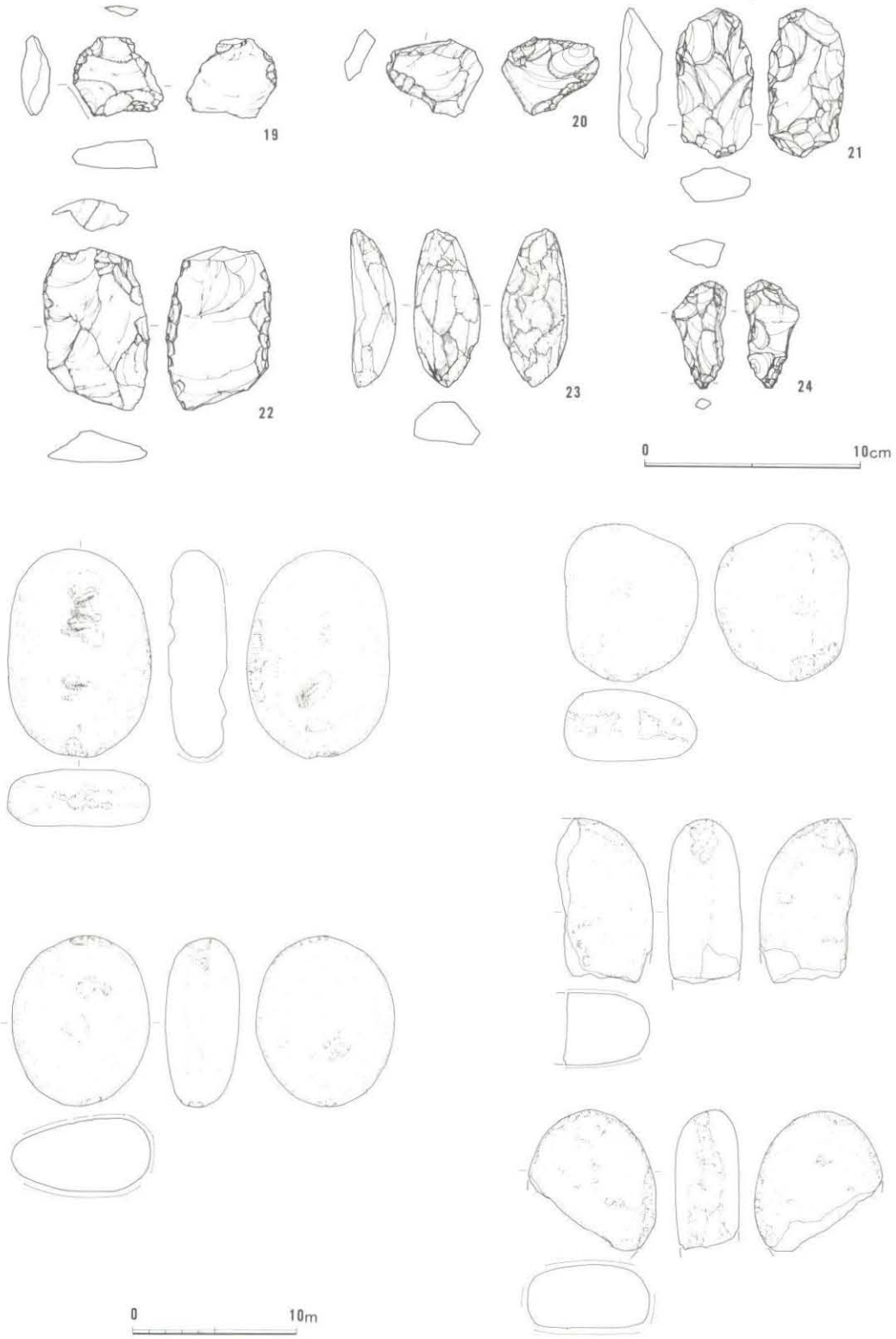
第14図　9号・10号住居跡実測図



第15図　9号住居跡出土土器拓影図



第16図　9号住居跡出土石器実測図



第17図　9号住居跡出土石器実測図

1～5は口縁部片で水平口縁を呈する。1・2は横位の隆帯を貼付する。1は隆帯上に刻みを施し口縁に沿って3条めぐる。2は頸部に2乗の隆帯をめぐらす。2・3の口縁部には、L・R縄文2本を一対にして横位と斜位の側面圧痕を施文し文様帯を構成し、胴部には縄文を施文する。2は0段3条RL横位縄文、3はRL横位縄文を施文する。4は附加条第1種LR横位縄文、5は口唇部よりRL横位縄文を施文する。

6～9は胴部片である。6・7は0段3条RL横位・縦位縄文を施文し、不規則な羽状を構成する。8はLR横位・RL横位縄文を施文し羽状を構成する。9はLR横位縄文を施文する。

10～16は底部付近片である。10～14・16は0段3条RL横位・LR横位縄文を施文するが、部分的に斜位回転が認められる条が縦走する。15はLR横位縄文とRL斜位縄文を施文し、文様区画をなす。

17は緩やかな波状口縁を呈し、口径21.8cmを計る。0段3条RL横位・LR横位縄文を施文し羽状を構成する。なお、口唇部の一部にも縄文が認められた。縄文帯の幅は約4cmである。18は水平口縁を呈し、口径16cmを計る。0段3条RL横位・LR横位縄文を施文し羽状を構成する。縄文帯の幅は約6cmである。

1～16は花積下層式、17・18は黒浜式に比定する。　(丸山公夫)

石器

本住居跡よりは、石鏃5、磨製石斧1、打製石斧2、石匙3、掻器3、削器8、垂飾品未製品1、石錐1、凹石1、磨石4、剥片14の計43点が出土している。剥片の石材の内訳は、黒色頁岩8、青白珪岩2、赤色珪質岩1、黒曜石1、ろう石1、不明1である。　(白石典之)

第2表　9号住居跡出土石器観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さcm)	重さ(g)	備考
1	石鏃	珪岩	2.7	1.5	0.4	1.0	床直出土
2	〃	黒色頁岩	2.6	1.4	0.4	0.8	〃
3	〃	鉄石英	2.6	1.9	0.6	3.5	〃
4	〃	頁岩	2.5	1.3	0.5	0.8	基部欠損品，覆土出土
5	〃	〃	1.6	1.2	0.4	0.5	床直出土
6	磨製石斧	黒色頁岩	9.8	4.2	2.3	122.2	刃部欠損，床直出土
7	打製石斧	〃	11.1	5.0	2.2	143.0	片面剥落，床直出土
8	〃	〃	7.2	4.7	2.4	81.5	床直出土
9	石匙	黒色安山岩	4.7	6.8	1.2	24.0	〃
10	〃	〃	3.5	5.0	0.7	8.5	〃
11	〃	黒色頁岩	6.0	5.0	1.1	25.0	〃
12	掻器	〃	5.5	4.2	1.3	25.5	〃
13	〃	〃	5.1	3.1	0.4	18.5	覆土出土
14	〃	頁岩	5.0	4.5	1.3	20.0	刃部鋸歯状，覆土出土
15	削器	黒色頁岩	4.9	3.7	0.8	23.0	床直出土
16	〃	〃	6.0	4.5	1.9	54.5	〃
17	〃	〃	9.6	3.0	0.7	30.0	〃

9号住居跡出土石器観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
18	削器	黒色頁岩	6.5	3.1	0.7	19.9	床直出土
19	〃	頁岩	3.8	3.8	1.3	11.5	覆土出土
20	〃	珪質頁岩	3.8	4.4	0.7	14.5	〃
21	〃	黒色頁岩	7.2	3.2	1.6	56.5	床直出土
22	〃	〃	7.3	4.7	1.5	79.0	〃
23	垂飾品未製品	ろう石	7.4	3.1	1.9	57.0	〃
24	石錐	変質凝灰岩	5.0	2.5	1.3	16.0	〃
25	凹石	安山岩	12.8	8.6	3.4	618.0	擦痕，敲打痕顕著，覆土出土
26	磨石	〃	10.5	8.3	4.5	612.0	〃 〃 床直出土
27	〃	〃	9.7	8.1	4.4	548.0	〃 〃
28	〃	〃	10.1	5.0	4.5	401.0	〃 〃 覆土出土
29	〃	〃	8.2	7.5	4.0	361.0	〃

10号住居跡（第14図、図版7）

本住居跡は、C－1グリッドに位置し、9号住居跡の北半分に重複する。本跡は、9号住居跡構築時に3/4程度切り取られ、平面形は不明瞭であるが残存壁より隅丸方形を呈すると思われる。規模は、東西4.58m、南北推定4.5mを測る。

壁は、北東コーナー部で良好に存在し、北・東・西壁の一部も存在する。壁高は、残存部分で東壁3cm、北壁5cm、西壁7cmを測る。

床は、東側のみ検出し平坦でしまりがある。ピットは、東壁よりに2本検出されたが、柱穴とは考えられない。

遺物の出土は、極めて少なく細片のため図化採拓が不可能であった。（丸山公夫）

11号住居跡（第18図、図版8）

本住居跡は、北側調査区中央東よりに検出し、C－2グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は東西3.24m、南北3.98mを測る。

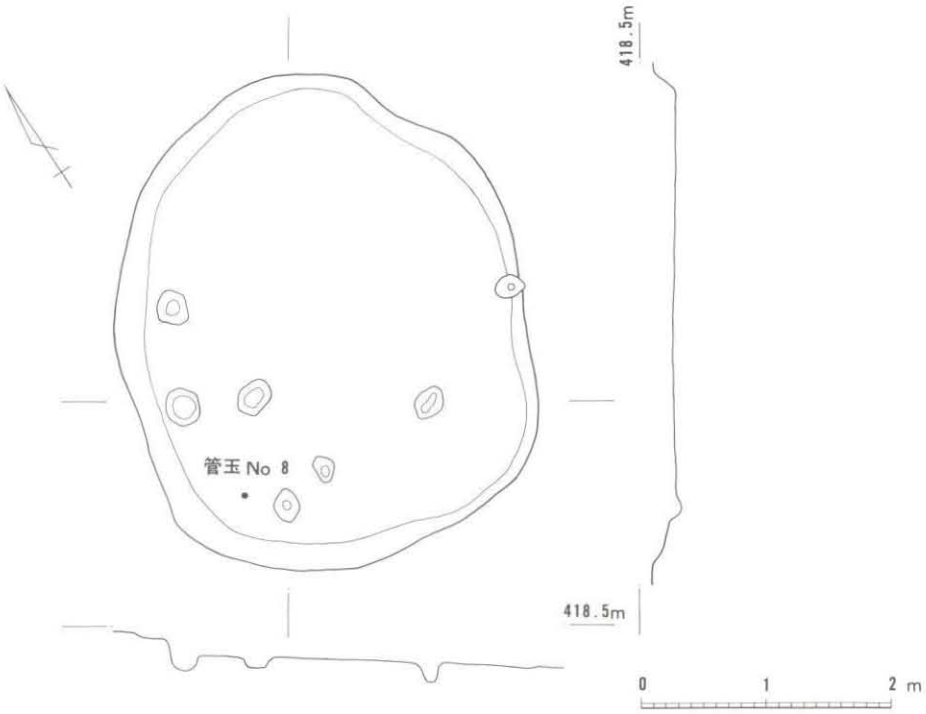
壁は、緩やかに立ち上がり、壁高は18cm～3cmである。床面は、しまりなく地形に沿って南東方向に傾斜する。炉は検出されなかった。ピットは7本検出されたが、その規則性はない。

遺物の出土は、少なく細片である。第19図1は住居跡中央南西側に分布出土した細片の接合資料である。また、8は西壁近く床面近く出土したが、9と合わせ他からの流れ込みとも考えられる。（丸山　公夫）

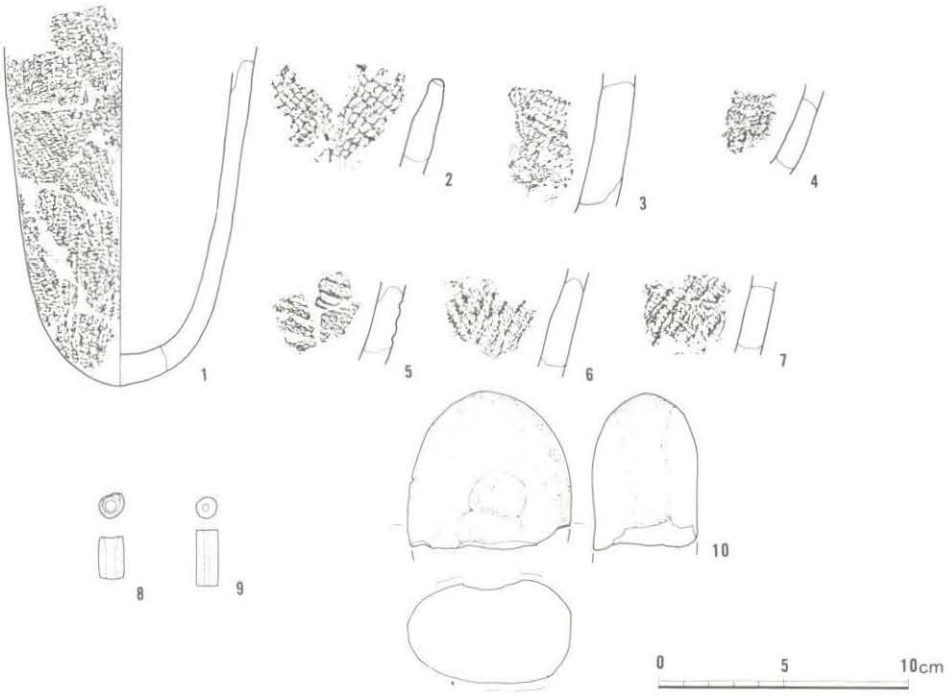
出土遺物（第19図、図版14）

土器

出土土器はすべて胎土に繊維を含む。1は尖底部片である。RL縄文を斜位に近く施文し、条走向は縦走する。2は波状口縁部片である。口唇部には棒状工具により刻みを施す。口唇下はRL横位・LR横位縄文を施文し菱形を構成する。3は不明瞭なRL横位縄文を施文する。



第18図　11号住居跡実測図



第19図　11号住居跡出土遺物拓影・実測図

4は尖底部付近片である。ＲＬ斜位縄文を施文する。5は平行沈線を施す。6は0段3条ＬＲ横位・ＲＬ横位縄文を施文する。7は0段3条ＬＲ横位縄文を施文する。

（丸山公夫）

石器

本住居跡よりは、凹石1、管玉2、剝片14の計17点が出土している。剝片の石材の内訳は、黒色頁岩5、安山岩2、珪質頁岩2、珪岩2、流紋岩2、頁岩1である。（白石典之）

番号	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
8	管　玉	そ う 石	1.7	1.0	0.3		
9	管　玉	碧　玉	2.3	0.9	0.3		覆土出土，混入か？
10	凹　石	輝石安出岩	6.1	6.6	4.2	236.0	周縁に敲打痕，床直出土

第3表　11号住居跡出土石器観察表

2．土　坑

本調査区より12基の土坑が検出された。調査区を2分する道路の北側調査区で4基、南側調査区で8基が検出した。

21号土坑

本土坑は、北側調査区C-0グリッドに位置し、9号住居跡西壁北側に接して検出された。平面形は円形で、断面鍋底状を呈する。規模は、直径110cm、深さ42cmを測る。ローム漸移層を覆土とする。遺物は、西・南壁面に出土した。

22号土坑

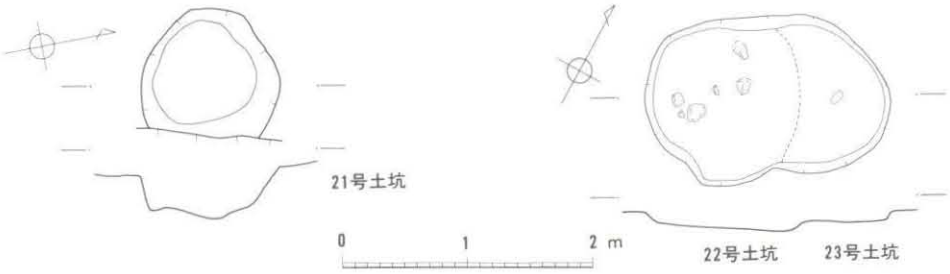
本土坑は、北側調査区C－2グリッドに位置し、東側は23号土坑と重複する。新旧関係は本土坑の方が新しい。平面形は円形、断面皿状を呈する。規模は、直径133cm、深さ10cmを測る。

遺物は、石器2点の他、径15cm程度の礫4点が中央西側に分布出土した。

23号土坑

本土坑は、C－2グリッドに位置し、22号土坑と西側で重複する。平面形は円形、断面皿状を呈する。規模は直径125cm、深さ8cmを測る。

遺物は、土坑中央床直に1点のみである。（丸山公夫）



第20図　土坑実測図（21～23号土坑）

24～33号土坑

24号土坑は北側調査区、他は南側調査区で検出された。C－4、D－2、Ḣ－4グリッドに於て方形或は長方形を主とする土坑が検出された。近・現代の所産と考えられるが、時期決定の出来る遺物が検出されず、性格・時期共に未確定である。（谷島一馬）

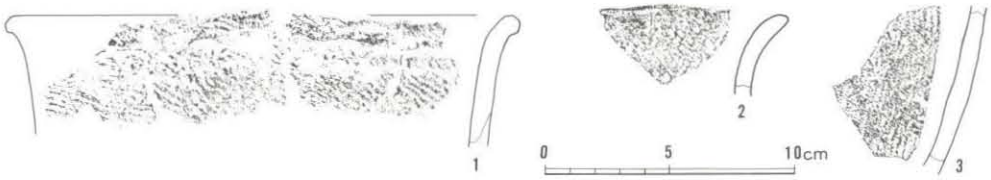
土坑番号	平面形	断面形	大きさ(長径×短径)(m)	深さ(m)	主軸方位	備考
24	円形	鍋底形	1.2×0.8	0.2		人頭大礫6個出土
25	楕円形	逆台形	1.0×0.7	0.15		底部は若干凹凸あり
26	長方形	鍋底形	2.3×1.0	0.2	N－22－W	〃
27	不整円形	〃	1.5×1.3	0.3		
28	方形	逆台形	1.9×1.6	0.3	N－32－W	均整な竪穴状の
29	〃	鍋底形	1.3×0.5	0.1	N－4－E	
30	楕円形	〃	1.3×1.2	0.1		
31	方形	〃	1.3×0.9	0.1	N－74－E	
32	長方形	逆台形	1.8×0.8	0.2	N－48－E	

第4表　土坑計測表（24～33号土坑）

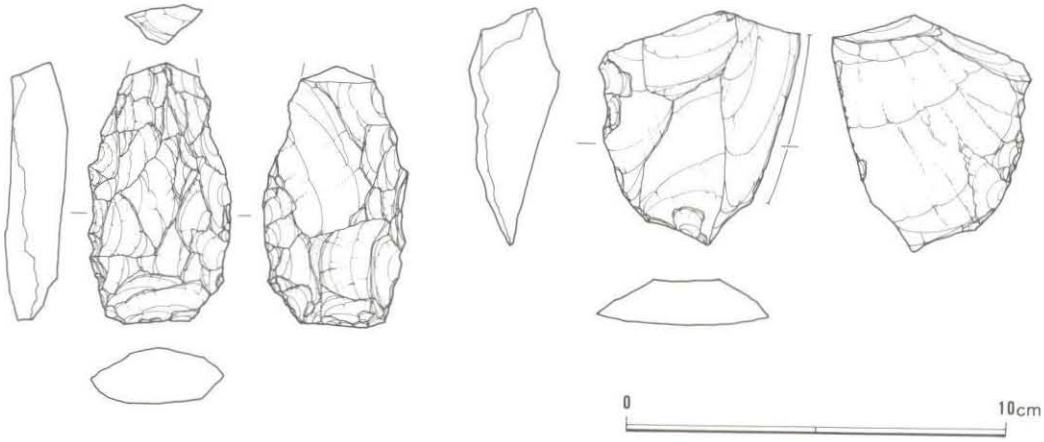
出土遺物

土器

土器の出土は21号土坑のみである。胎土に繊維を含み、器壁は0.7cm程の薄手のものである。1・2は口縁部片である。1は口径25cmを推計する。口唇部と胴部には細いRL横位縄文を施文し、口唇部下には無文帯をもつ。2は口唇部直下に無文帯をめぐらし、以下胴部は細いLR



第21図　土坑出土土器拓影図



第22図　土坑出土石器実測図

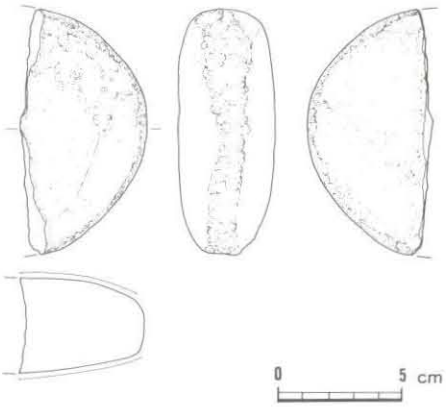
横位縄文を施文する。3は尖底部付近片である。細いＲＬ斜位縄文を施文する。　　（丸山公夫）

石器

第22図１・２は22号土坑底面に付着するように２点のみが出土した。１は尖頭器の先端部欠損品、黒色安山岩製で重量48.0ｇ。２は黒色頁岩製の削器で重量51.5ｇ。

第23図は23号土坑より花崗岩製の周縁に敲打痕のある磨石が出土したのみである。重量は276ｇ。

（白石典之）

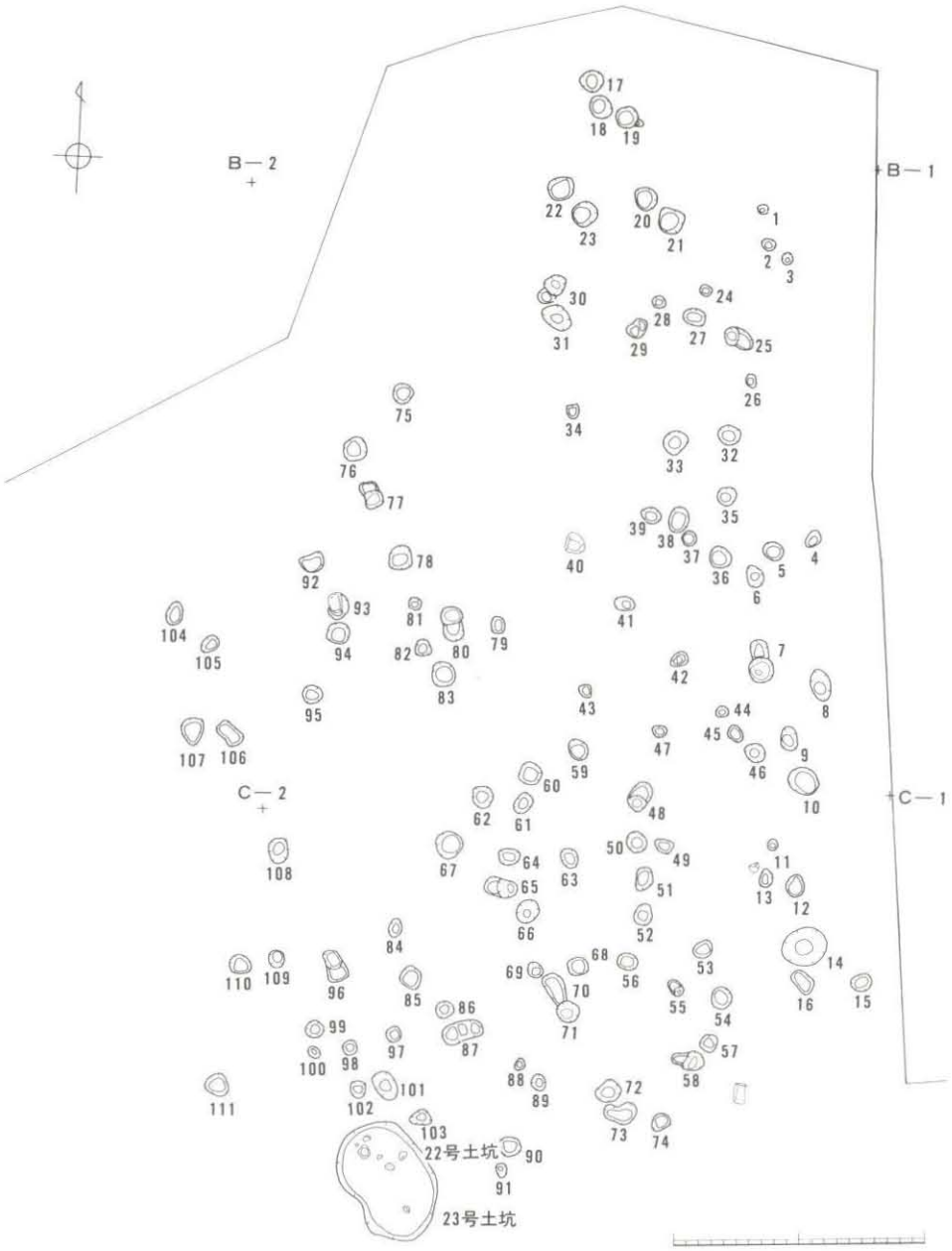


第23図　土坑出土石器実測図

３．ピット群

当調査区の北側B—１・B—２・D—１・D—2グリッドに於て柱穴状のピットが極めて細かな密度で集中的に検出された。本ピット群中の各ピットを結ぶと掘立柱建物址として把握可能なピットや、縄文の遺構を想定される結合もあるが、いづれも隅然的な確率が高く恣意的な観察は避け、各ピットの計測値の記録にとどめる。

ピット番号	上径(m)		底径(m)		深さ(m)	ピット番号	上径(m)		底径(m)		深さ(m)	ピット番号	上径(m)		底径(m)		深さ(m)
	最大	最小	最大	最小			最大	最小	最大	最小			最大	最小	最大	最小	
P—1	0.19	0.14	0.08	0.07	0.22	P—21	0.45	0.39	0.30	0.27	0.16	P—41	0.35	0.22	0.14	0.10	0.45
P—2	0.24	0.17	0.12	0.09	0.23	P—22	0.44	0.39	0.34	0.25	0.39	P—42	0.30	0.22	0.18	0.15	0.29
P—3	0.18	0.16	0.08	0.06	0.13	P—23	0.42	0.38	0.27	0.25	0.51	P—43	0.21	0.20	0.15	0.12	0.12
P—4	0.30	0.20	0.18	0.12	0.39	P—24	0.20	0.17	0.11	0.08	0.18	P—44	0.20	0.18	0.12	0.8	0.28
P—5	0.36	0.28	0.22	0.19	0.30	P—25	0.50	0.30	0.14	0.14	0.38	P—45	0.30	0.30	0.20	0.14	0.27
P—6	0.37	0.27	0.15	0.13	0.51	P—26	0.22	0.16	0.10	0.09	0.07	P—46	0.34	0.31	0.14	0.12	0.46
P—7	0.69	0.28	0.30	0.27	0.73	P—27	0.35	0.27	0.24	0.14	0.20	P—47	0.22	0.20	0.14	0.10	1.00
P—8	0.52	0.32	0.21	0.17	0.57	P—28	0.22	0.20	0.12	0.09	0.13	P—48	0.48	0.32	0.20	0.15	0.16
P—9	0.38	0.26	0.22	0.16	0.49	P—29	0.37	0.27	0.18	0.13	0.29	P—49	0.30	0.22	0.20	0.12	0.43
P—10	0.49	0.43	0.38	0.30	0.58	P—30	0.54	0.31	0.15	0.11	0.52	P—50	0.32	0.30	0.19	0.18	0.42
P—11	0.19	0.18	0.09	0.08	0.27	P—31	0.53	0.36	0.21	0.15	0.40	P—51	0.40	0.28	0.22	0.14	0.35
P—12	0.37	0.29	0.27	0.20	0.25	P—32	0.37	0.30	0.22	0.18	0.44	P—52	0.34	0.29	0.18	0.14	0.24
P—13	0.30	0.20	0.18	0.01	0.29	P—33	0.41	0.38	0.22	0.18	0.50	P—53	0.32	0.26	0.33	0.18	0.24
P—14	0.73	0.63	0.28	0.24	0.63	P—34	0.22	0.20	0.12	0.10	0.22	P—54	0.35	0.34	0.26	0.18	0.32
P—15	0.34	0.30	0.22	0.16	0.27	P—35	0.31	0.29	0.17	0.13	0.46	P—55	0.30	0.30	0.20	0.14	0.24
P—16	0.43	0.27	0.34	0.16	0.42	P—36	0.35	0.34	0.25	0.22	0.63	P—56	0.35	0.30	0.20	0.18	0.33
P—17	0.38	0.37	0.22	0.17	0.28	P—37	0.24	0.22	0.16	0.16	0.21	P—57	0.30	0.26	0.16	0.14	0.32
P—18	0.39	0.33	0.22	0.20	0.25	P—38	0.42	0.33	0.28	0.21	0.36	P—58	0.52	0.32	0.22	0.20	0.15
P—19	0.47	0.35	0.24	0.24	0.38	P—39	0.34	0.26	0.18	0.13	0.24	P—59	0.39	0.30	0.36	0.32	1.02
P—20	0.39	0.36	0.27	0.22	0.18							P—60	0.35	0.34	0.22	0.18	0.38



第24図　ピット群実測図

ピット番号	上径(m)		底径(m)		深さ(m)	ピット番号	上径(m)		底径(m)		深さ(m)	ピット番号	上径(m)		底径(m)		深さ(m)
	最大	最小	最大	最小			最大	最小	最大	最小			最大	最小	最大	最小	
P−61	0.34	0.24	0.20	0.14	1.74	P−81	0.20	0.20	0.12	0.10	0.39	P−101	0.38	0.32	0.16	0.18	0.80
P−62	0.35	0.33	0.20	0.18	0.57	P−82	0.28	0.26	1.5	0.14	0.53	P−102	0.22	0.20	0.12	0.10	0.26
P−63	0.34	0.26	0.20	0.12	0.34	P−83	0.40	0.34	0.30	0.26	0.52	P−103	0.34	0.24	0.15	0.12	0.27
P−64	0.24	0.26	0.20	0.10	0.48	P−84	0.30	0.21	0.12	0.11	0.41	P−104	0.40	0.22	0.25	0.18	0.15
P−65	0.50	0.28	0.12	0.10	0.58	P−85	0.40	0.36	0.24	0.22	0.39	P−105	0.30	0.24	0.20	0.12	0.7
P−66	0.40	0.34	0.10	0.10	0.28	P−86	0.30	0.28	0.14	0.14	0.32	P−106	0.42	0.24	0.34	0.14	0.9
P−67	0.42	0.40	0.28	0.24	0.27	P−87	0.64	0.30	0.40	0.26	0.51	P−107	0.42	0.36	0.30	0.26	0.33
P−68	0.34	0.20	0.22	0.20	0.27	P−88	0.20	0.18	0.10	0.10	0.28	P−108	0.40	0.30	0.20	0.18	0.36
P−69	0.26	0.22	0.24	0.22	0.33	P−89	0.28	0.21	0.12	1.10	0.31	P−109	0.30	0.24	0.20	1.14	0.53
P−70	0.50	0.30	0.35	0.18	0.18	P−90	0.38	0.32	0.21	0.18	0.29	P−110	0.34	0.30	0.20	0.20	0.17
P−71	0.38	0.34	0.18	0.14	0.35	P−91	0.21	0.16	0.08	0.06	0.49	P−111	0.38	0.36	0.26	0.20	0.22
P−72	0.42	0.38	0.21	0.16	0.50	P−92	0.38	0.28	0.30	0.20	0.41						
P−73	0.52	0.30	0.40	0.18	0.41	P−93	0.04	0.32			0.47						
P−74	0.32	0.26	0.18	0.16	0.17	P−94	0.34	0.38	0.22	0.20	0.36						
P−75	0.34	0.34	0.22	0.20	0.55	P−95	0.30	0.28	0.20	0.14	0.33						
P−76	0.40	0.36	0.20	0.20	0.54	P−96	0.54	0.30	0.22	0.18	0.39						
P−77	0.40	0.30	0.22	0.16	0.14	P−97	0.22	0.22	0.12	0.12	0.42						
P−78	0.40	0.36	0.24	0.18	0.56	P−98	0.24	0.20	0.10	0.10	0.21						
P−79	0.28	0.20	0.18	0.10	0.55	P−99	0.30	0.28	0.18	0.16	0.27						
P−80	0.54	0.30	0.20	0.20	0.44	P−100	0.20	0.16	0.10	0.04	0.28						

※　p−40は欠番とする。

第5表　ピット群計測表

V　まとめ

本遺跡では平安時代の住居跡が検出された。これらの住居跡はいずれも羽釜や土師質土器を伴出しており、平安時代でも比較的新しい時期に属すると思われる。次に出土遺物より各住居跡の年代観について検討したい。

4号住居跡

本住居跡からは羽釜、土師坏、皿が出土している。羽釜は外面を上から下への削りを施しており、ロクロは未使用である。坏は比較的小形で器肉が厚く、底部回転無調整である。皿は口径が10cm前後で、器高が3cm前後とかなり低い特徴をもっており、いずれも油煙の付着が認められる。上記のような特徴をもつ土器群は清里陣場遺跡の編年における第6期群に相当すると考えられる。

6号住居跡

本住居跡は土師器羽釜、土師器碗、須恵器坏、須恵器碗が出土している。羽釜は胴部が張り口縁部が直立しており、外面体部の整形が下から上へのケズリとなっており、いわゆる月夜野

型羽釜と呼ばれるものである。土師器碗は低い高台をもち、口縁部が外反しており、須恵器碗とほぼ同じ形態をする。須恵器坏は底部回転糸切り無調整で、口縁部を外反する。以上が本住居址の土器群の概要であるが、回転糸切り無調整の須恵器坏を伴出することから9世紀後半から10世紀前半のいずれかの時期に収まると思われ、清里陣場遺跡の2～3期土器群に相当すると考えられる。

8号住居跡

本住居跡からは土師器甕、土師器坏、土師器皿が出土している。土師器甕は鍔をもたないものの形態的には羽釜に良く類似する。土師器坏は底部を回転糸切り無調整とし、口縁部がやや外反する。土師器皿は口径が9㎝前後、器高が2.5㎝前後とかなり小さい。以上のように8号住居跡は4号住居跡の土器群とほぼ同じ特徴をもち、清里陣場の第6期群に相当すると考えられる。（谷島一馬）

本遺跡出土の石器類について特筆すべき点をあげたい。まず縄文早期、撚糸文系土器群に伴出する石器群の検出が重要である。吾妻川流域においては小野上村八木沢清水遺跡から稲荷原式期の遺物が検出されているが(石坂、1978)、本遺跡の例はさらに遡ったものと言える。土坑という限定された空間からの出土例として点数は少ないが貴重な資料と言える。次に縄文前期の住居跡より出土した石器類に見られる出土状況があげられる。土器と同様に吹上パターン的性格を示す覆土出土のものと住居床直出土のものとにそれらは大別できる。両者に器種の上からの差はほとんど認められないが、近接住居との比較検討を経て、その性格を明らかにする必要がある。最後に玉類の検出をあげたい。3点のうち碧玉製のものは覆土出土で、技術的にも精巧で後世の混入ではないかと思われる。ろう製のものは縄文前期に類例が認められるものである。未製品を含んでいることから、今後、同様の資料の集積、石材産地の同定、製作技術等を総合しての検討が必要な資料といえる。（白石典之）

参考文献

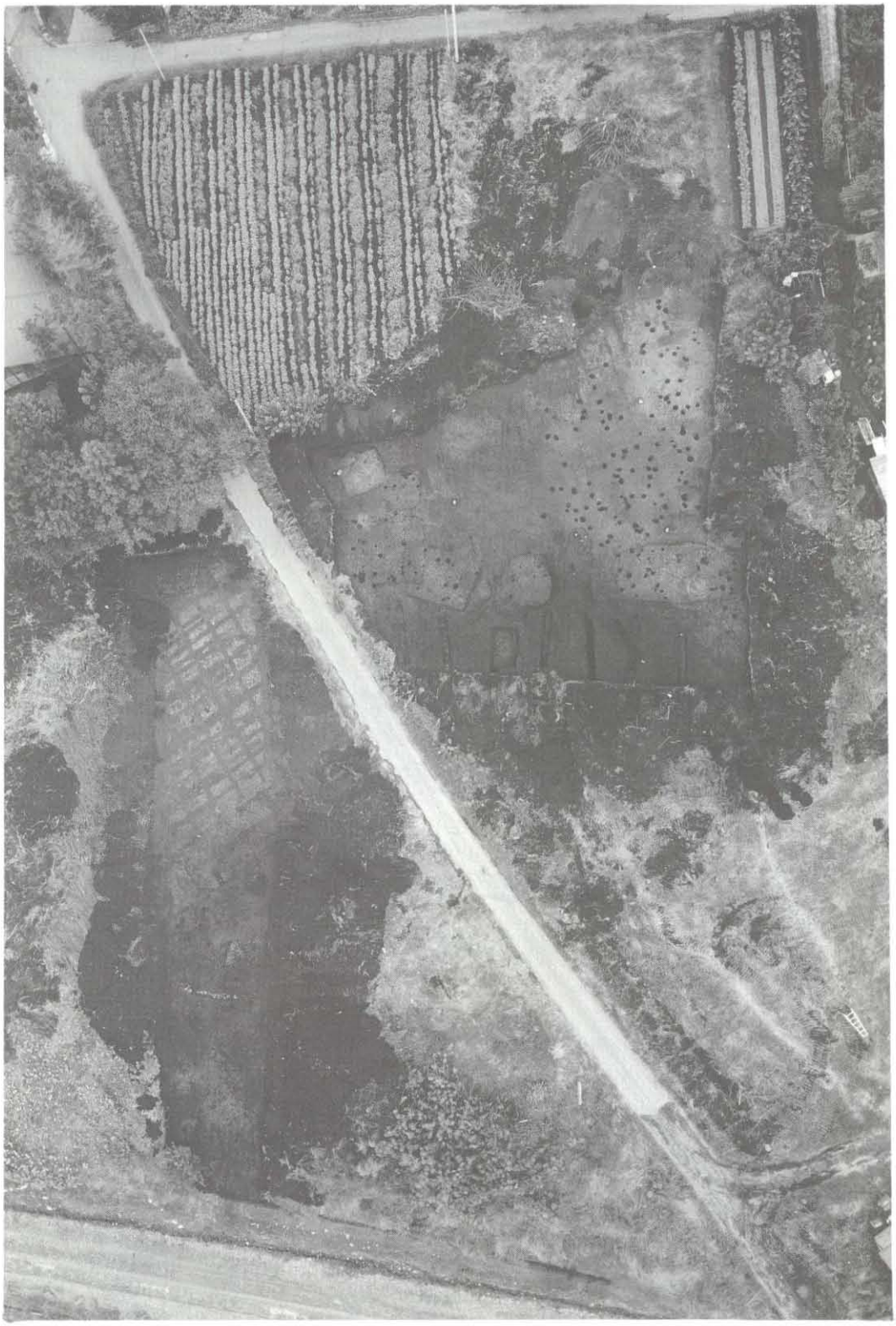
石坂茂『八木沢清水遺跡』　小野上村教育委員会　1978

Ⅵ　結　語

五十嵐遺跡第2次発掘調査の概要を述べてきた。ここでは本遺跡において気づいたことを要約してみたい。縄文時代早期、21号土坑の発見は中之条町で早期土器片の見られる岩本・天台・清水・細尾各遺跡に先だち初めて検出された遺構である。縄文時代前期、9号住居跡は長軸10m、短軸4mを測る隅丸長方形で、通常の住居に比べ非常に大型で特異な形態である。平安時代、8号住居跡は顕著な間仕切り溝がある。北側1/3と中央東側を1.3m×1.4mに4区画を設け、他の空間より一段高くなりベッド状を呈している。このような施設は、この時期において非常にめずらしいものである。

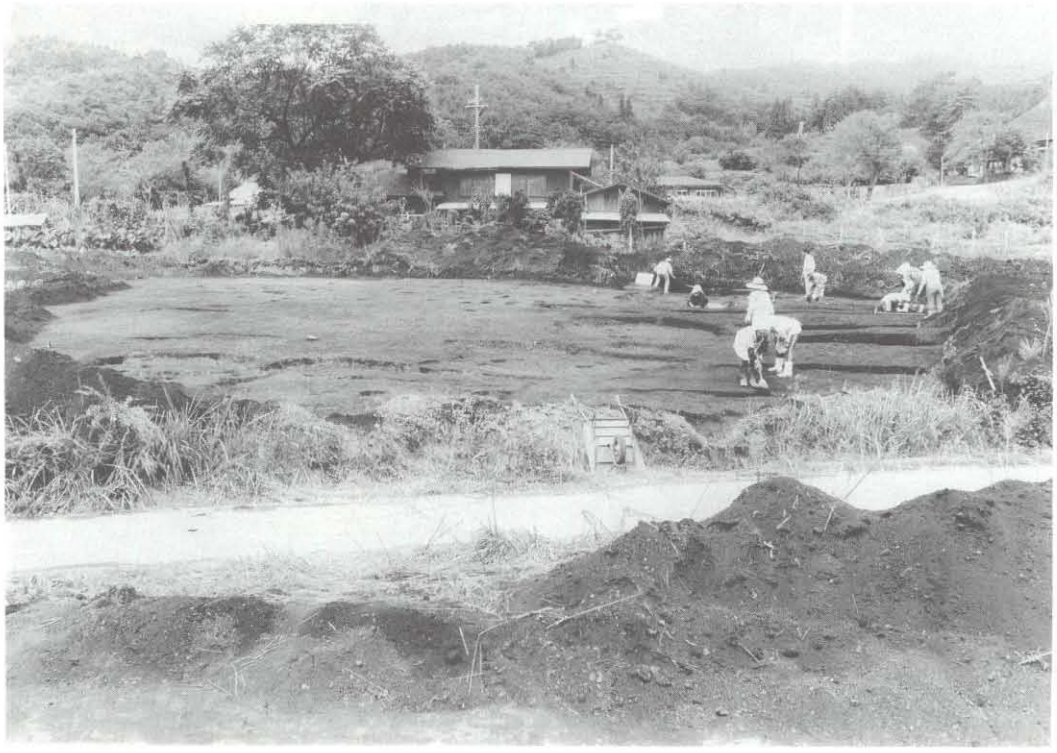
最後になりましたが、御指導・御助言をいただきました関係諸機関、関係者各位に記して感謝の意を表します。（丸山）

図版 1



五十嵐遺跡全景

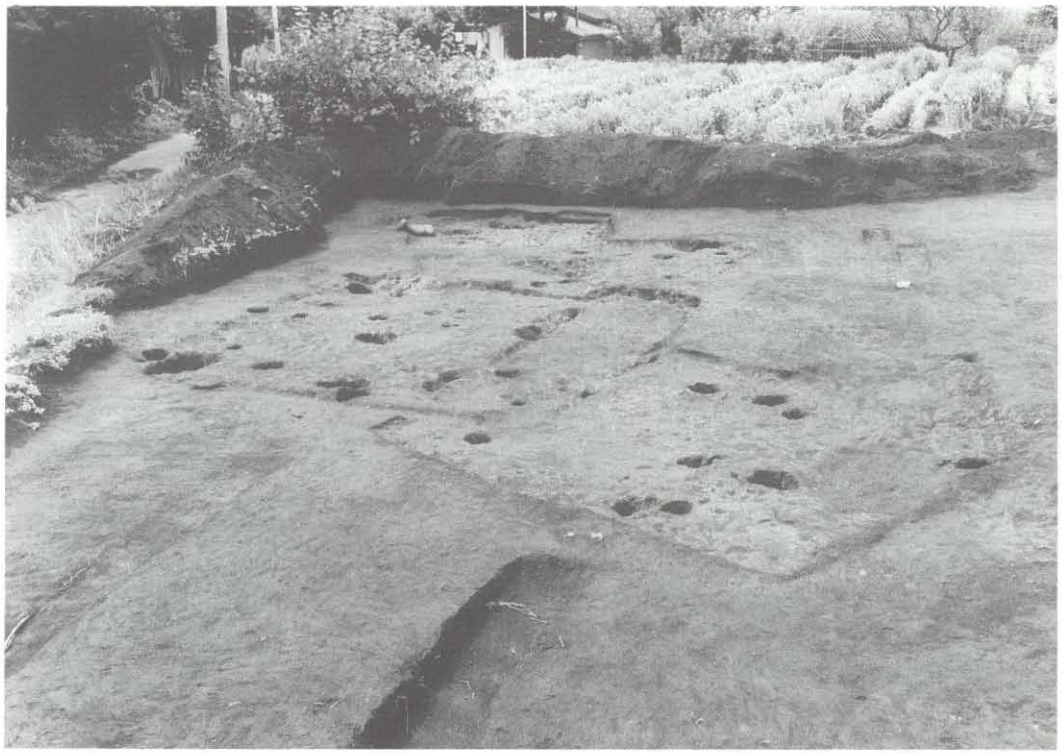
五十嵐遺跡遠景



五十嵐遺跡北側区近景

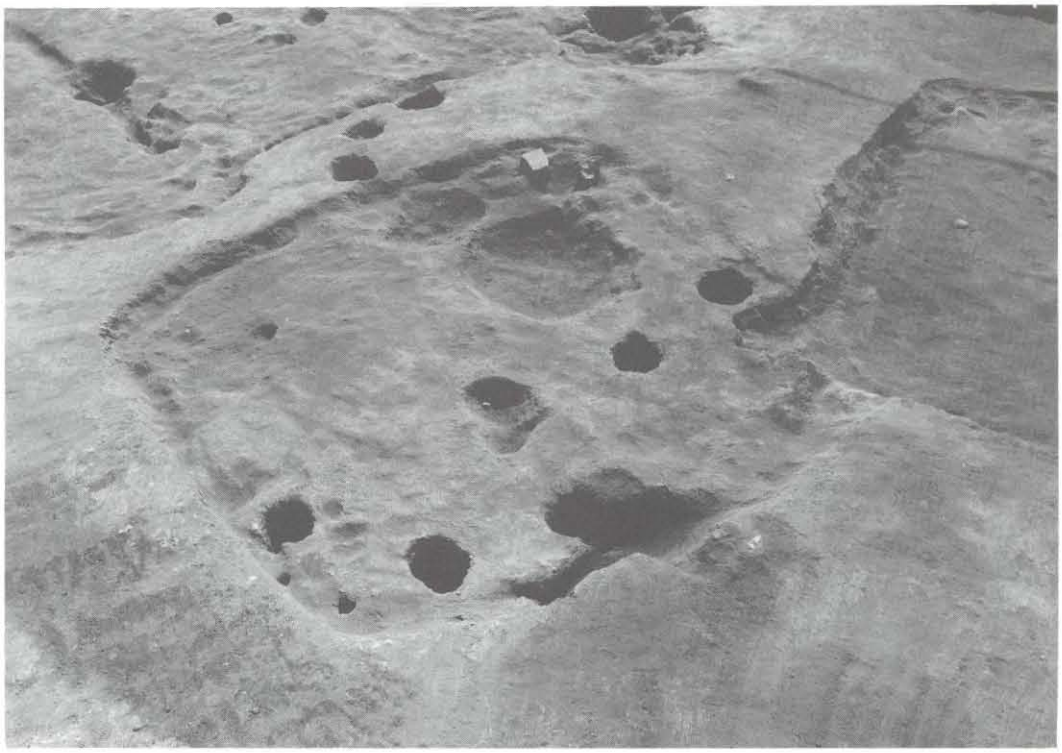
図版 3

五十嵐遺跡南側区近景



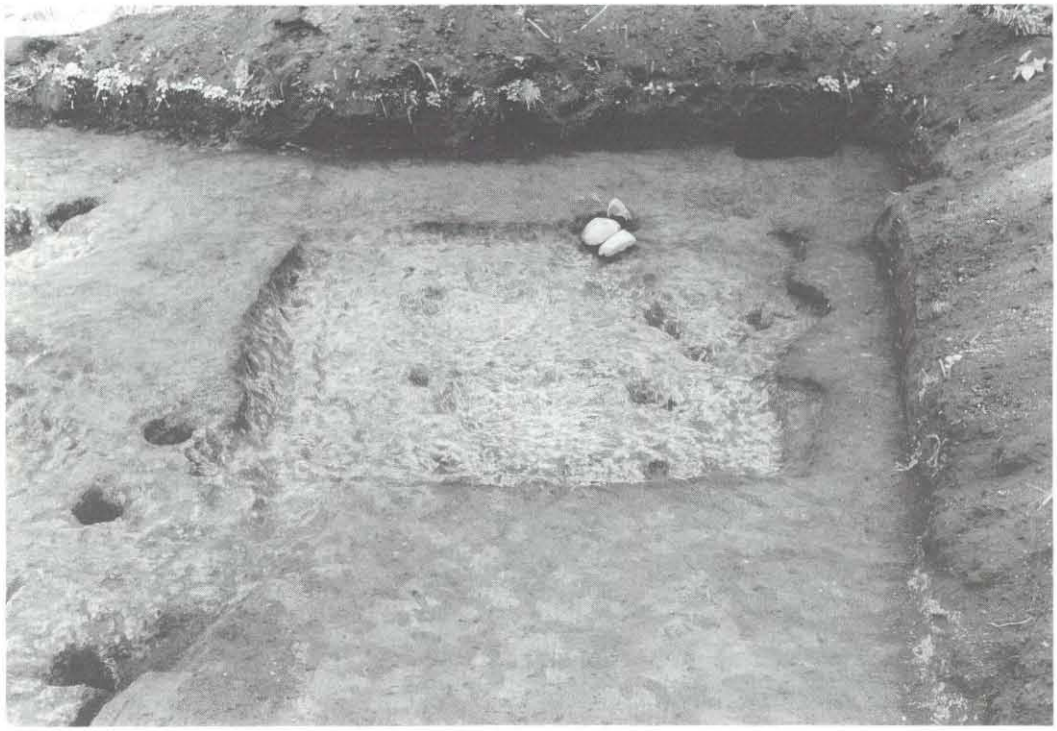
4 号～ 7 号住居跡

4 号住居跡



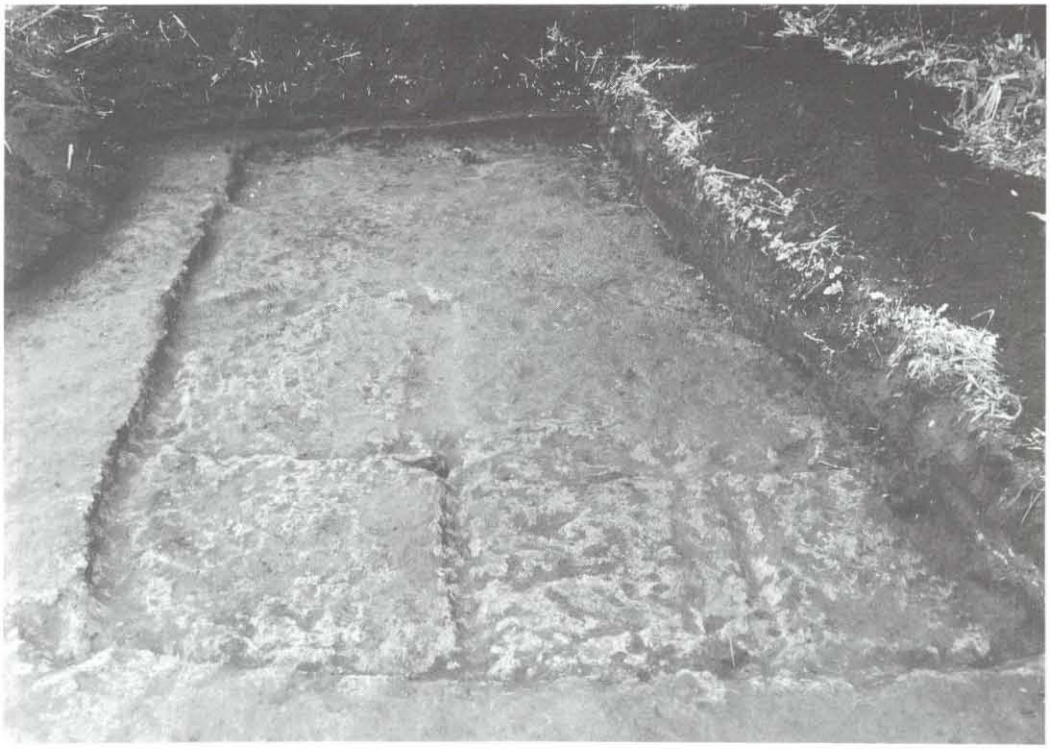
5 号住居跡

図版 5



6 号住居跡

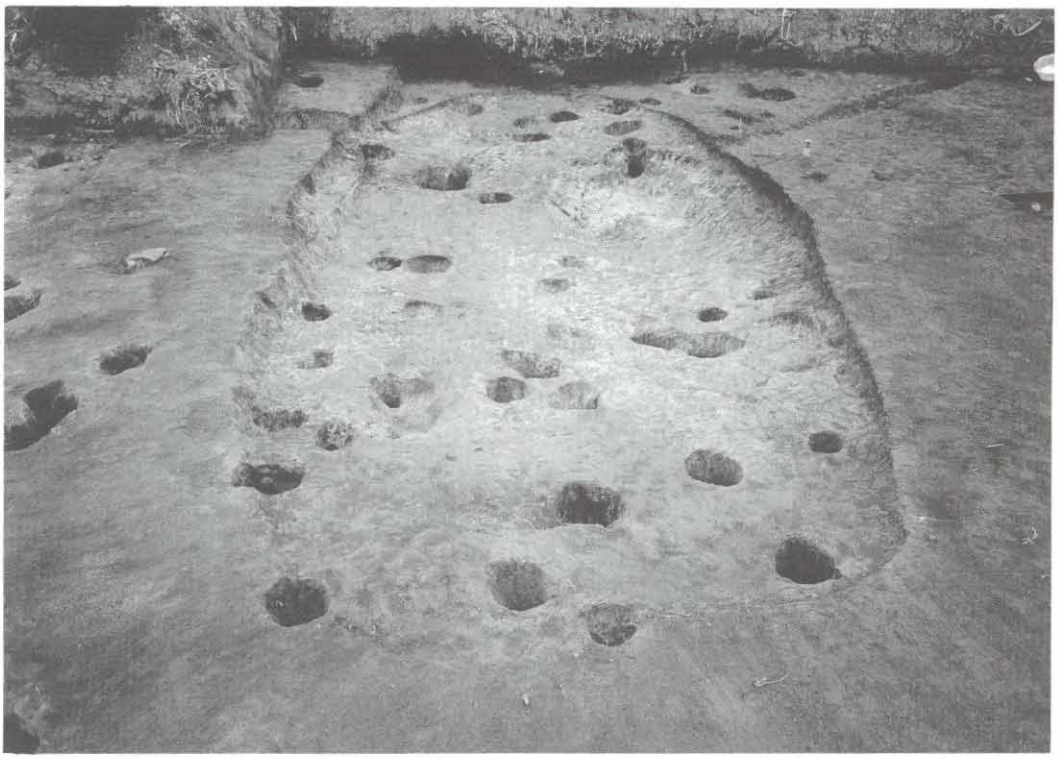
7 号住居跡



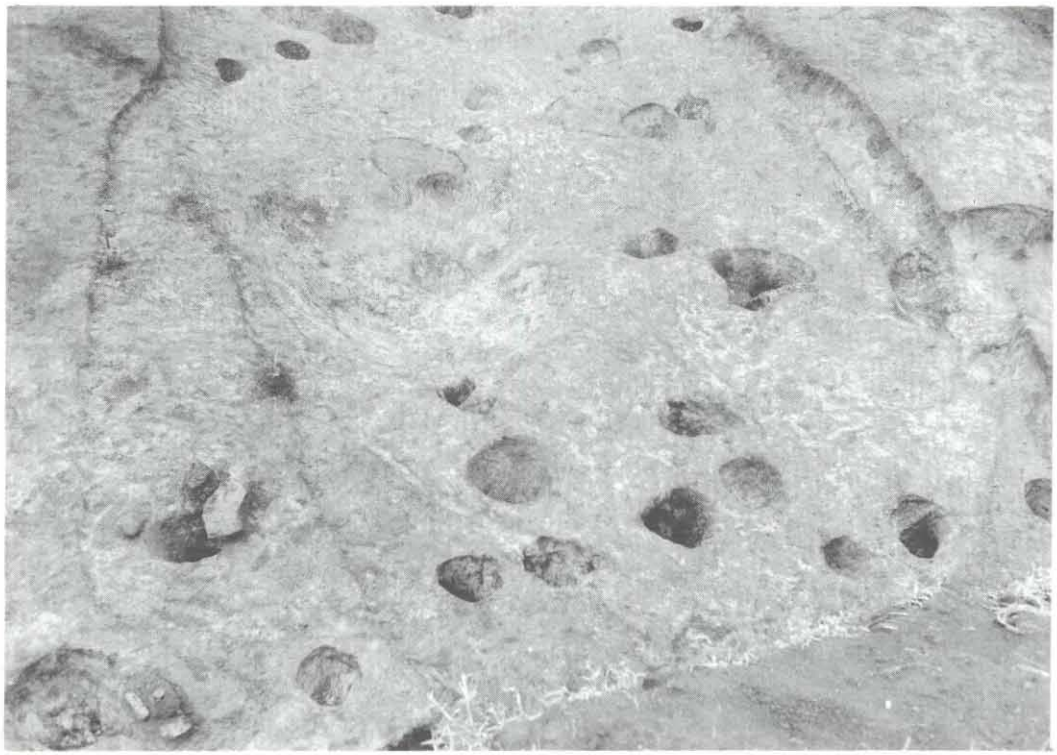
8 号住居跡

8 号住居跡炭化材分布

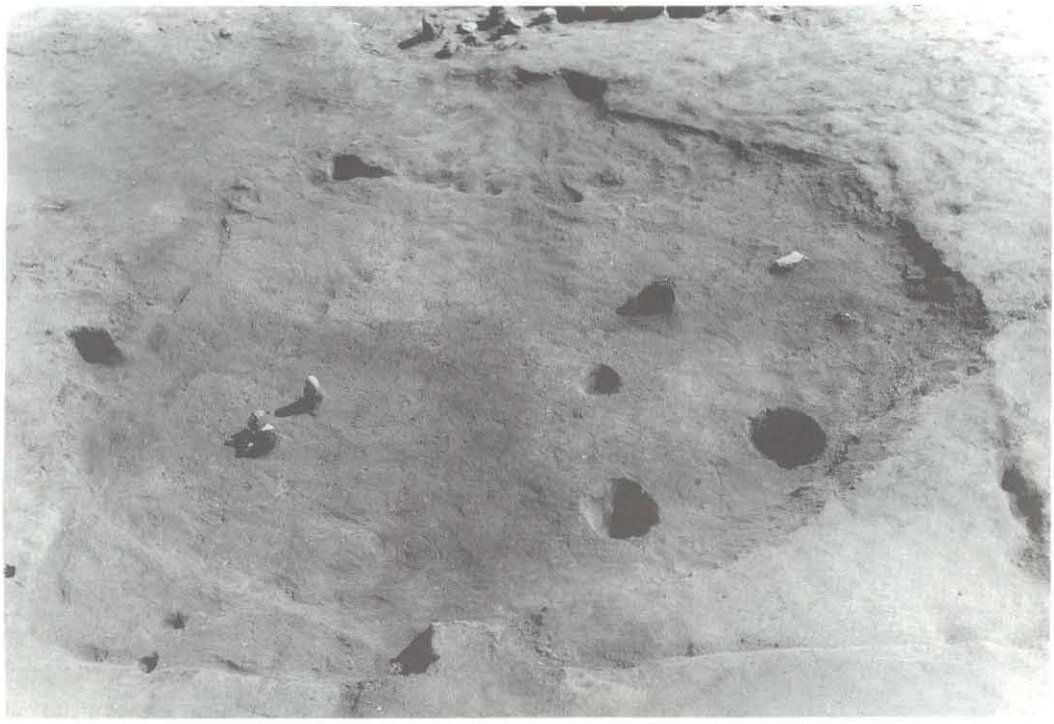
図版 7



9 号住居跡



10号住居跡



11号住居跡

21号土坑

22・23号土坑

図版 9

4 H— 1

4 H— 2

4 H— 3

4 H— 4

4 H— 5

4 H— 6

4 H— 7

4 H— 8

4 H— 9

住居跡出土遺物（1）

6 H—1

6 H—2

6 H—3

6 H—4

6 H—5

6 H—6

6 H—7

6 H—9

住居跡出土遺物（2）

8 H－1

8 H－2

8 H－3

8 H－4

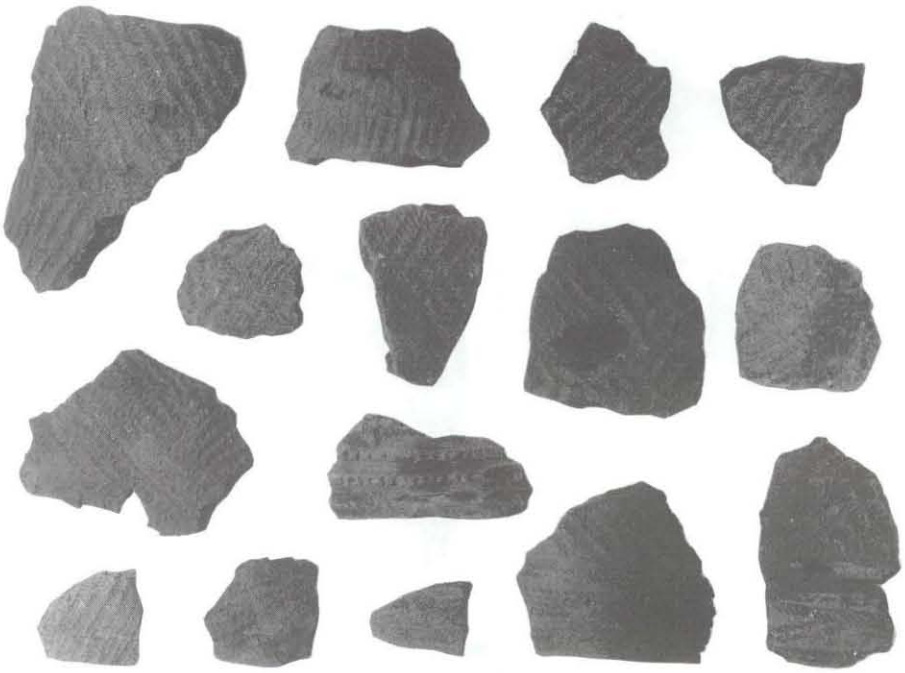
8 H－5

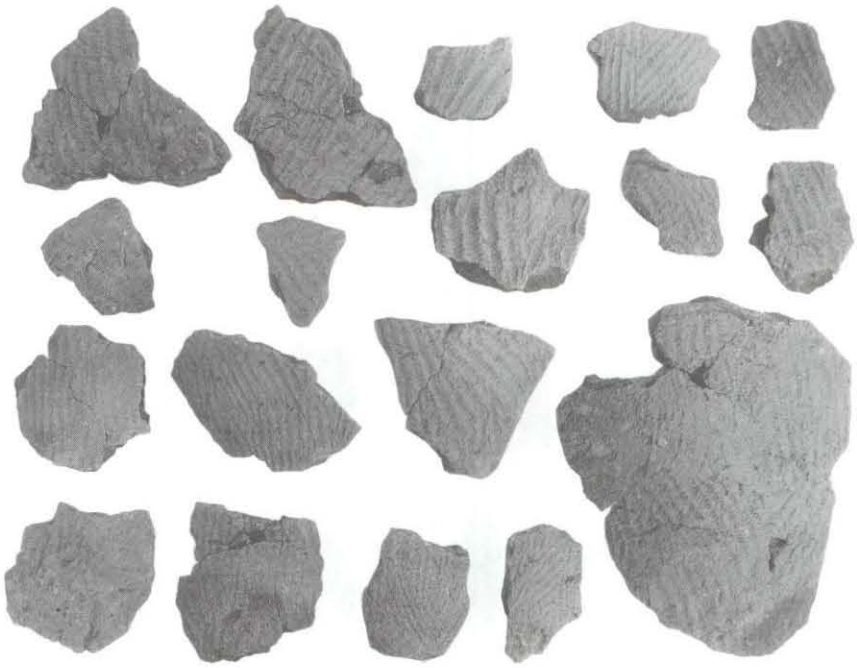
8 H－6

8 H－7

8 H－8

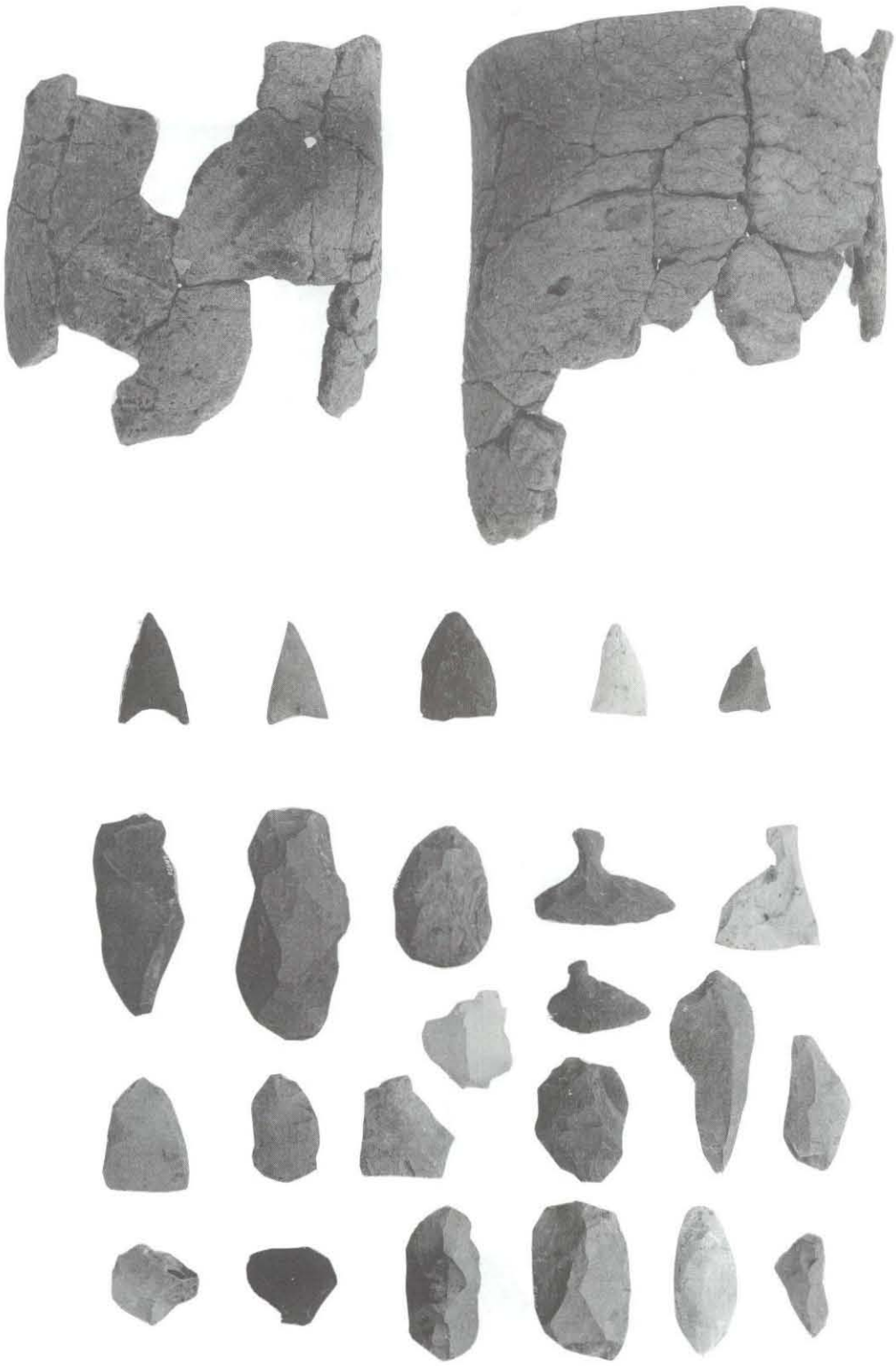
住居跡出土遺物（3）



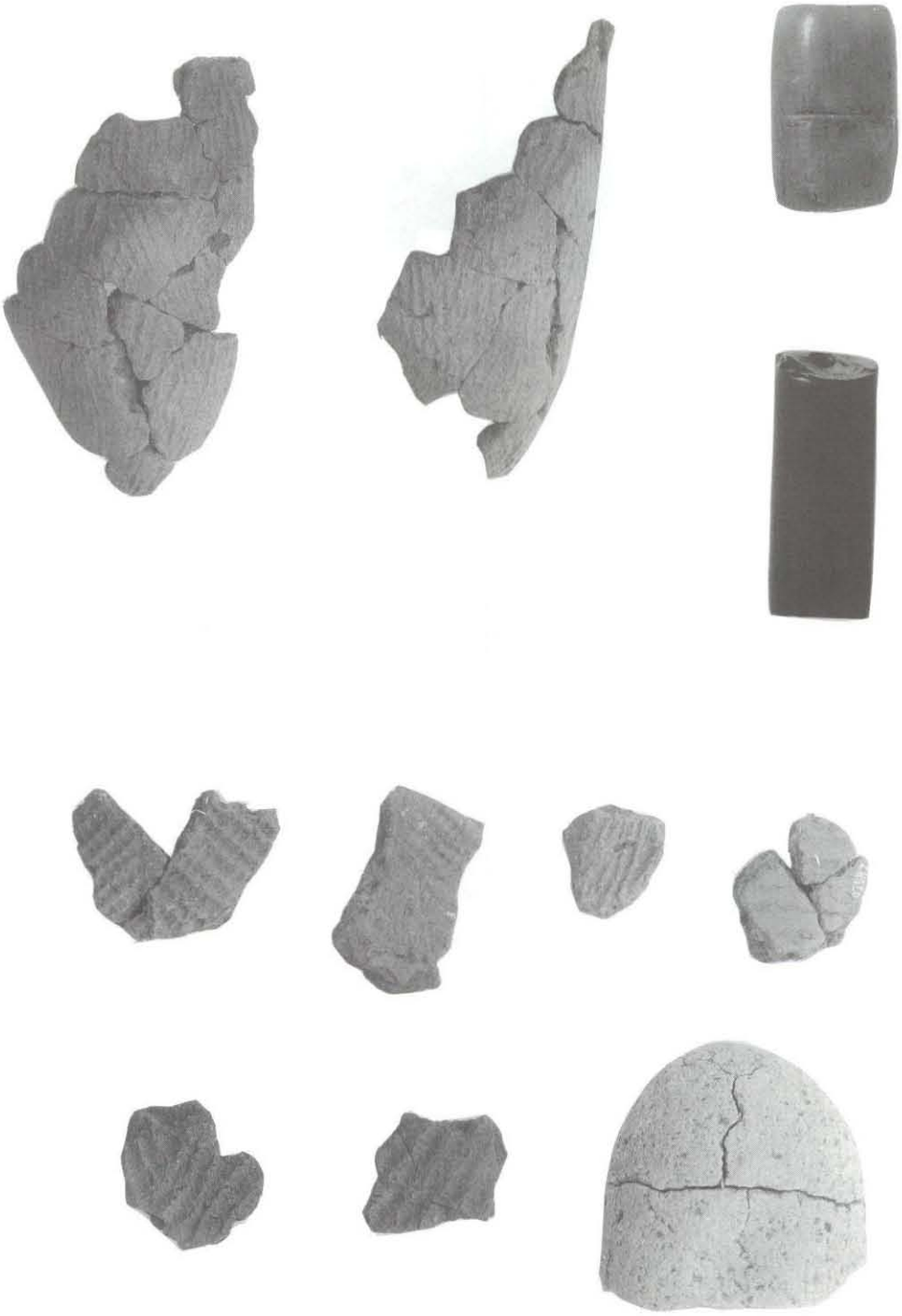


9号住居跡出土土器

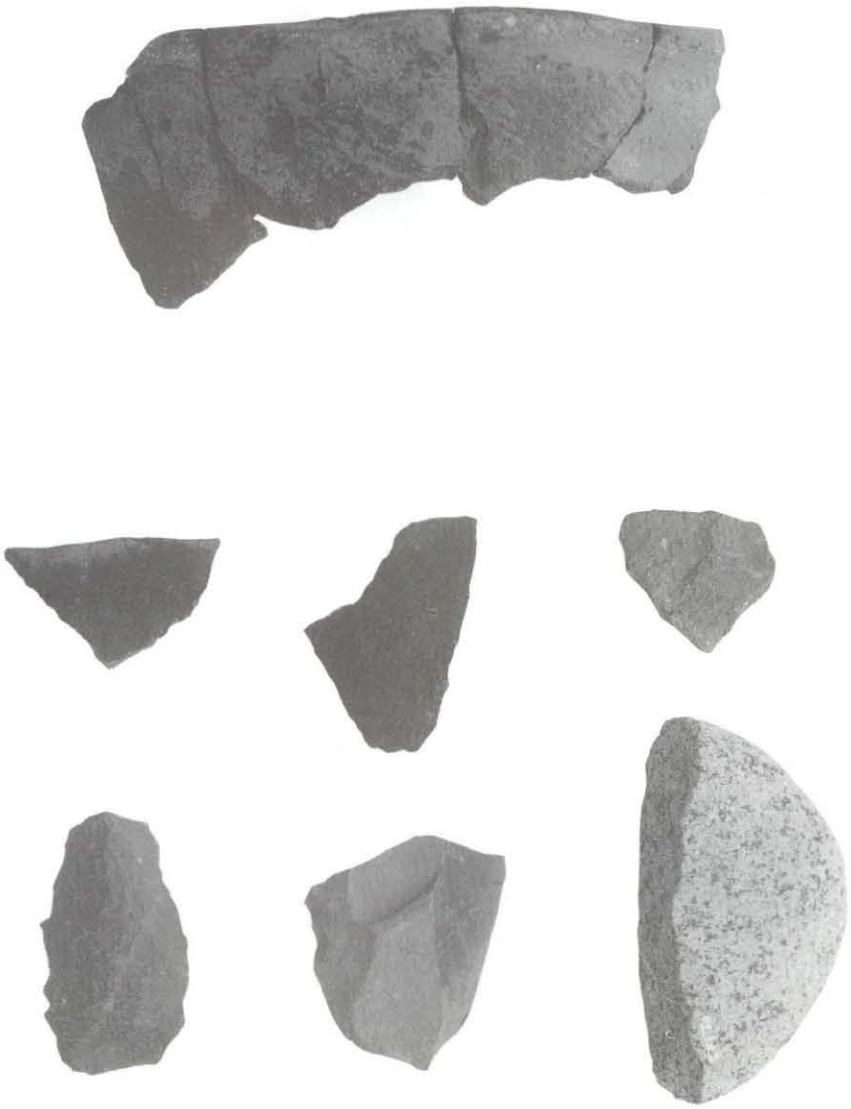
図版13



9号住居跡出土土器・石器



11号住居跡出土土器・石器



土坑出土土器・石器

印刷　昭和61年３月
発行　昭和61年３月

編集　群馬県吾妻郡中之条町教育委員会社会教育課
発行　群馬県吾妻郡中之条町教育委員会
〒377―04 吾妻郡中之条町大字中之条町1091
電話　029―75―２１１１

印刷　大道印刷工業